

# 漢点字 講習用 テキスト

## 初級編 第四回 (全十回)

横浜漢点字羽化の会  
二〇〇四年十一月二十日

### 目次

4 基本文字 (3)	
比較文字	
3. 長さ、重さ、容積の単位を表す比較文字	
※ 長さ、距離の単位を表す比較文字 .....	1
〈尺 <sup>㇀</sup> 寸 <sup>㇁</sup> 丈 <sup>㇂</sup> 里 <sup>㇃</sup> 〉	
※ 重さの単位を表す比較文字 .....	3
〈貫 <sup>㇄</sup> 匁 <sup>㇅</sup> 斤 <sup>㇆</sup> 屯 <sup>㇇</sup> 〉	
※ 容積の単位を表す比較文字 .....	4
〈升 <sup>㇈</sup> 斗 <sup>㇉</sup> 勺 <sup>㇊</sup> 〉	
近似文字 .....	5
〈斥 <sup>㇋</sup> 丘 <sup>㇌</sup> 〉	
比較文字に類似した文字 .....	6
※ 「乗」 と 「垂」      〈乗 <sup>㇍</sup> 垂 <sup>㇎</sup> 〉	
※ 「浮」 と 「沈」      〈浮 <sup>㇏</sup> 沈 <sup>㇐</sup> 〉	
♪ 愛唱歌 「アルプス 1 万尺」 .....	8
読みの練習 (15) .....	9
書き取り問題 (15) .....	10
5 複合文字 (2)	
1. 第一基本文字と比較文字で構成される文字 (1)	
※ 「中 <sup>㇑</sup> 」を部首として含む文字三つ .....	12
〈仲 <sup>㇒</sup> 沖 <sup>㇓</sup> 忠 <sup>㇔</sup> 〉	
※ 「右 <sup>㇕</sup> 」を部首として含む文字一つ .....	13
〈若 <sup>㇖</sup> 〉	
※ 「左 <sup>㇗</sup> 」を部首として含む文字一つ .....	13
〈佐 <sup>㇘</sup> 〉	

※ 「大」を部首として含む文字六つ	14
〈器 春〉	
・「因」とそれを部首として含む文字一つ	〈因 恩〉
・「央」とそれを部首として含む文字一つ	〈央 英〉
※ 「天」の上に点が二つ付いたものを部首として含む文字二つ	
〈関 送〉	
※ 「夫」を部首として含む文字二つ	16
〈規 贊〉	
※ 「小」を部首として含む文字	17
・「肖」とそれを部首として含む文字一つ	〈肖 消〉
※ 「低」の旁を部首として含む文字一つ	18
〈底〉	
※ 「氏」を部首として含む文字一つ	19
〈紙〉	
♪♪愛唱歌 「冬景色」	20
読みの練習 (16)	21
書き取り問題 (16)	23
2. 第一基本文字と比較文字で構成される文字 (2)	
※ 「良」を部首として含む文字四つと、 「良」を部首として含む文字六つ	24
・「良」を部首として含む文字四つ	〈朗 娘 郎 浪〉
・「良」を部首として含む文字六つ	〈眼 銀 根 限 退 既〉
※ 「可」を部首として含む文字六つ	28
〈阿 河〉	
・「何」とそれを部首として含む文字一つ	〈何 荷〉
・「奇」とそれを部首として含む文字一つ	〈奇 寄〉
※ 「東」を部首として含む文字一つ	30
〈練〉	
※ 「西」を部首として含む文字四つ	31
〈煙 要〉	
・「票」とそれを部首として含む文字一つ	〈票 標〉
♪♪♪愛唱歌 「月の沙漠」	33
読みの練習 (17)	34
書き取り問題 (17)	36
3. 第一基本文字と比較文字で構成される文字 (3)	
※ 「皆」を部首として含む文字一つ	38
〈階〉	
※ 「尺」を部首として含む文字三つ	38
〈駅 沢 訳〉	

※ 「寸」を部首として含む文字十四と、 時間に関係する文字二つ	4.0
〈守 村 討 冠 団 導〉	
・「付」とそれを部首として含む文字一つ 〈付 府〉	
・「寺」とそれを部首として含む文字五つ、および時間を表す文字二つ 〈寺 詩 持 待 等 時 年 秒〉	
♪♪♪♪愛唱歌 「郵便馬車の馭者だった頃」	4.7
読みの練習 (18)	4.8
書き取り問題 (18)	4.9
4. 第一基本文字と比較文字で構成される文字 (4)	
※ 「里」を部首として含む文字五つ	5.1
〈量〉	
・「重」とそれを部首として含む文字三つ	〈重 種 動〉
・「動」を旁とする文字一つ	〈働〉
※ 「貫」を部首として含む文字一つ	5.3
〈慣〉	
※ カタカナの「ク」を頭に置いた文字三つ	5.4
〈負 免〉	
・「免」を偏とする文字一つ	〈勉〉
※ 「斤」を部首として含む文字四つ	5.5
〈近 質 所 折〉	
※ 「屯」を旁とする文字一つ	5.7
〈純〉	
※ 「升」を部首として含む文字一つ	5.7
〈昇〉	
※ 「丘」が含まれる形の文字二つ	5.8
〈兵 浜〉	
※ 「斗」を部首として含む文字一つ	5.9
〈科〉	
※ 「勺」を部首として含む文字一つ	6.0
〈約〉	
※ 「垂」を部首として含む文字一つ	6.0
〈睡〉	
♪♪♪♪愛唱歌 「汽車」	6.1
読みの練習 (19)	6.2
書き取り問題 (19)	6.4
① ティータイム 大岡 信『〈折々のうた〉を読む』	6.6
【附】 これまでに出てきた漢点字一覧	6.8

## 4 基 文 (3)

### 較 文

#### 3. 長さ、重さ、容積の位を表す較文

ここでは、〈較文〉の中で、長さ・距離・重さ・容積の位を表す文を、ご紹介します。

#### ※長さと距離の位を表す較文

##### (27) 尺 シャク セキ

さい「口」の縦線が斜めに伸びて垂れた形（しかばね）と、その根から、斜めの線が引かれた形の文です。「しゃく」は、メートルの位の、すなわち、約センチメートルの長さを表す位です。時代によって、場所によって、その長さには違がありますが、の指を広げた幅にするるとわれます。現では尺を長さの位として用いることは少なくなりましたが、のには、まだまだ生きています。また、これを部として含む漢も沢山あります。漢では、「」で表されます。

「貫法」「取虫」「(かねじゃく)」

「鯨」「巻き」

##### (28) 寸 スン

縦横の線が、やや寄りで交差して、縦の線がでに撥ねた形、また、線の交差のにをれた形の文です。指の長さを表すとわれます。位としては、のの長さ、すなわち、約センチメートルに当たります。ほんの僅か、極めて少ない、ちょっとだけというを表す文です。漢では、「」で表されます。

「志」 「法」 「借詐欺」 「(ちよつと)」  
「燐」 「の虫にもの魂」

(29) 丈 ジョウ たけ

に交差した縦の線のがに向かい、それに斜め線がの形に交わった形の文です。の形も、斜め線が、交差した所よりも少しにます。を広げて長さをる形を表しているといわれます。この長さは、の倍、すなわち、約メートルです。背のさ、背のい、「丈」とは、の立派なのはです。「丈」とは、の角形のの、今の畳半(、つまり)よりやや広い形です。修僧の庵を呼ぶとして用いられます。漢では、「」で表されます。

「」 「気」 「記」 「背」  
「身の」 「べ」 「りっ」 「っ」  
「いの」

(30) 里 リ さと

角く区切りをつけた「田」のに「土」を置いた形の文です。「さと」は、ではない、また山でもない、を区切って耕作して生している所、かつては生産のであった農業地域をします。そこから、嫁ぎからた実、成長した供が独立した所からた親というに用されます。もうつ、「り」と読んで、耕作する積を区切ることから、距離の位としても用いられるようになりました。くでは、里を約メートルとしていますが、現のでは、約メートルです。位は、時代と場所によって、きな変をします。漢では、「」で表されます。

「程標」 「芋」 「親」 「帰り」  
「」 「山」 「村」

## ※重さの𠄎𠄎位を表す𠄎較文𠄎。

### (31) 貫𠄎𠄎 カン つらぬく

𠄎𠄎は𠄎𠄎い𠄎殻を𠄎𠄎ねた形に𠄎𠄎𠄎する文𠄎𠄎と𠄎われま  
す。𠄎𠄎𠄎に𠄎𠄎をあけて紐を通すという𠄎𠄎𠄎𠄎です。“つら  
ぬく”とは、最初から最後までやり通す、𠄎𠄎𠄎筋を通すとい  
う𠄎𠄎𠄎𠄎で、𠄎𠄎に紐を通して𠄎𠄎ねたことから生じました。  
また“かん”と読んで、重さの𠄎𠄎位としても用いられます。  
𠄎貫は、約𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎グラムです。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」  
で表されます。

「𠄎𠄎通」「𠄎𠄎徹」「𠄎𠄎頭衣」「𠄎𠄎𠄎𠄎法」  
「𠄎𠄎𠄎𠄎」

### (32) 𠄎𠄎𠄎 もんめ め

カタカナの「ク」とカタカナの「メ」を重ねた形の文𠄎𠄎です。  
重さの𠄎𠄎位で、我が𠄎𠄎で作られた𠄎𠄎𠄎𠄎です。“もんめ”  
は、𠄎𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎の重さで、約𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎グラムです。  
𠄎𠄎に“め”とも言います。また、江𠄎時代の𠄎𠄎幣の𠄎𠄎位「文」  
(このテキストでは、まだ𠄎𠄎て𠄎𠄎ていません。)の𠄎𠄎𠄎𠄎にも  
用いられました。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

\* カタカナの「ク」の形の印が頭につく文𠄎𠄎があります。漢𠄎𠄎𠄎𠄎  
では、「𠄎𠄎」で表すことが多いようです。この「𠄎𠄎𠄎」の漢𠄎𠄎𠄎𠄎  
符号に𠄎𠄎𠄎𠄎していると理解してよいのではないかと𠄎𠄎います。

### (33) 斤𠄎𠄎 キン コン おの

𠄎を切ったり割ったりするときに𠄎𠄎う𠄎𠄎𠄎「おの」の刃を  
象った文𠄎𠄎です。その刃を重りにして、ものの重さを𠄎𠄎った  
ことから、重さの𠄎𠄎位を表すようになりました。𠄎斤は𠄎𠄎  
𠄎𠄎𠄎𠄎で、約𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎グラムです。現𠄎𠄎では、𠄎パンを販  
売するときの𠄎𠄎きさとして馴染んでいます。この文𠄎𠄎は、部  
𠄎𠄎の「おのづくり」として、他の多くの文𠄎𠄎に含まれていま  
す。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𪛗量」 「𪛗パン𪛗𪛗𪛗」

(34) 屯𪛗 ㄊㄨㄣ ㄊㄞˊ ㄊㄞˊ - する

植物が地𪛗に根を張って、今にも芽を𪛗そうとしている所を象った文𪛗と𪛗われます。地𪛗にエネルギーが漲っている様𪛗を表しています。「たむろする」と読んで、𪛗が沢山集まって、がやがやと騒がしい様𪛗に用いられます。兵隊を集めて治𪛗に当てることを「駐屯」と𪛗い、その場所を「屯所」と𪛗います。また、𪛗治時代の𪛗海𪛗に、𪛗の防備と𪛗拓を𪛗的に置かれたのが「屯兵」でした。この文𪛗は、重さの𪛗位を表すものではありませんが、メートル法の「トン」を𪛗する漢𪛗「噸𪛗」の𪛗に含まれていますので、〈𪛗文𪛗〉に𪛗えられました。漢𪛗では、「𪛗」で表されます。

「𪛗所」 「𪛗營」 「𪛗兵」 「駐𪛗」

※容積の𪛗位を表す𪛗文𪛗。

(35) 升𪛗 ショウ ます

穀物や液𪛗を𪛗れたマスを、𪛗で持って𪛗に𪛗げて、𪛗量を量る様𪛗を表す文𪛗です。「マス」を𪛗するとともに、その容積の𪛗位をも表します。𪛗升は約𪛗リットル、𪛗の𪛗倍に当たります。漢𪛗では、「𪛗」で表されます。

「𪛗瓶」 「𪛗榘」

(36) 斗𪛗 ト ひしゃく

柄のついたヒシャクを象った文𪛗です。ヒシャクで穀物や液𪛗の容量を量ることから、容積の𪛗位に用いられるようになりました。𪛗斗は約𪛗リットル、𪛗の𪛗倍に当たります。また、ヒシャクの形から、星座の名にも用いられます。漢𪛗では、「𪛗」で表されます。

「𪛗缶」 「𪛗米」 「𪛗星」

(37) 勺 𠂔 𠂔 シャク セキ く - む

「つつみがまえ」（後の包の項でご紹𠂔𠂔します）の𠂔𠂔に𠂔𠂔を𠂔𠂔れた形の文𠂔𠂔です。ヒシャクで、酒や汁を汲み取る形を象っています。「くむ」の読みは、そこから生じました。「しゃく、せき」は、容積の𠂔𠂔位、𠂔𠂔𠂔𠂔の𠂔𠂔の𠂔𠂔、𠂔𠂔𠂔𠂔の𠂔𠂔𠂔𠂔の𠂔𠂔で、約𠂔𠂔𠂔ミリリットルです。他にも𠂔𠂔積の𠂔𠂔位として、𠂔𠂔坪の𠂔𠂔𠂔𠂔の𠂔𠂔、登山の路程の𠂔𠂔𠂔𠂔の𠂔𠂔、𠂔𠂔𠂔𠂔の𠂔𠂔の𠂔𠂔の𠂔𠂔𠂔𠂔があります。漢𠂔𠂔𠂔𠂔では、「𠂔𠂔」で表されます。「𠂔𠂔」は、「𠂔𠂔構え」とともに、「つつみがまえ」として用いられます。

---

近似文𠂔𠂔

---

(1) 斥 𠂔 𠂔 セキ しりぞ - ける うかが - う

「斥𠂔𠂔」の〈近似文𠂔𠂔〉です。「斥𠂔𠂔」の𠂔𠂔側の縦の線に、𠂔𠂔さな𠂔𠂔を𠂔𠂔えた形です。おので断ち割る𠂔𠂔𠂔𠂔があります。「斥𠂔、排斥」と用いて「しりぞける」の𠂔𠂔𠂔𠂔を、「斥候」（𠂔𠂔隊の𠂔𠂔𠂔で、𠂔𠂔を𠂔𠂔る役𠂔）と用いて、「うかがう」の𠂔𠂔𠂔𠂔を表します。漢𠂔𠂔𠂔𠂔では、「𠂔𠂔」で表されます。

「𠂔𠂔𠂔𠂔」「𠂔𠂔候」「排𠂔𠂔」「除𠂔𠂔」

(2) 丘 𠂔 𠂔 キュウ おか

「升𠂔𠂔」の〈近似文𠂔𠂔〉です。𠂔𠂔地の盛り𠂔𠂔がった𠂔𠂔さな山のことで、𠂔𠂔は、𠂔𠂔辺が窪んだ、盆地の𠂔𠂔𠂔𠂔がありました。また𠂔𠂔くは、𠂔𠂔を𠂔𠂔く盛り𠂔𠂔げた墓も指しました。漢𠂔𠂔𠂔𠂔では、「𠂔𠂔」で表されます。

「𠂔𠂔陵」「墳𠂔𠂔」「段𠂔𠂔」

## 乗 乗 乗 乗 に類似した文 乗 乗

ここでご紹介する文 乗 乗 は、〈乗 乗 乗 乗〉ではありませんが、墨 乗 乗 の 乗 乗 形に共通する所があったり、漢 乗 乗 乗 乗 の 乗 乗 形が指事的であったり、〈乗 乗 乗 乗〉と 乗 乗 格を共 乗 乗 する文 乗 乗 です。

ここでは、乗 乗 組・乗 乗 文 乗 乗 をご紹介 乗 乗 します。

### ※「乗」と「垂」。

\* この乗 乗 乗 乗 つの文 乗 乗 は、原 乗 乗 は異なりますが、常用漢 乗 乗 では、乗 乗 の部 乗 乗 が同じ形をしています。乗 乗 に、「乗」では「木 乗 乗」が、「垂」では「土 乗 乗」が置かれます。

#### (1) 乗 乗 乗 乗 ジョウ の - る の - せる

この文 乗 乗 の 乗 乗 の部 乗 乗 は、乗 乗 が足を交差させて踏ん張っている形を象っていると 乗 乗 われます。その 乗 乗 に、「木 乗 乗」を置いた形です。「のる、のせる」とは、乗 乗 が乗り物や乗 乗 にのることです。「のせる」と読んで、乗 乗 をその気にさせること、「じょうずる」と読んで、弱みにつけ込む乗 乗 乗 乗 にも用いられます。また、乗 乗 算の乗 乗 法、「かけ算」の乗 乗 乗 乗 も表します。同じ乗 乗 を乗 乗 へ乗 乗 へと積み重ねて乗 乗 く、その乗 乗 算を乗 乗 います。漢 乗 乗 乗 乗 では、乗 乗 辺のカタカナの「ノ」の形を「乗 乗」で、「木 乗 乗」を「乗 乗」で表します。

「乗 乗 乗 乗」「乗 乗 降客」「乗 乗 乗 乗」「乗 乗 用 乗 乗」

「乗 乗 減 乗 乗 除」「乗 乗 の乗 乗 乗 乗 は乗 乗」

「乗 乗 乗 乗 乗 乗 乗 乗」「乗 乗 乗 乗 乗 乗」「乗 乗 乗 乗 乗 乗」

#### (2) 垂 乗 乗 スイ た - れる た - らす

「乗 乗 乗 乗」の 乗 乗 の部 乗 乗 の 乗 乗 に「土 乗 乗」を置いた形の文 乗 乗 です。乗 乗 の部 乗 乗 は「乗 乗 乗 乗」とは異なって、穀物の穂が実って垂れた形を表しています。「たれる、たらす」と読んで、乗 乗 から乗 乗 へものが垂れ 乗 乗 がる、乗 乗 から乗 乗 へ乗 乗 乗 乗 ぐに垂れる、液 乗 乗 が垂れ落ちる、乗 乗 から乗 乗 へ乗 乗 賜する、申し 乗 乗 える等の乗 乗 乗 乗 があります。漢 乗 乗 乗 乗 では、「乗 乗」で表され

ます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「枝𠄎𠄎れ桜」 「雨𠄎𠄎れ」 「虫𠄎𠄎𠄎𠄎」

### ※「浮」と「沈」。

\* この𠄎𠄎文𠄎𠄎も〈𠄎𠄎較文𠄎𠄎〉ではありませんが、𠄎𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎と漢𠄎𠄎𠄎𠄎の符号から、グループとして理解されます。

(3) 浮𠄎𠄎 フ う - く う - かぶ う - かべる

「さんずい」の𠄎𠄎側にカタカナの「ノ、ツ」、その𠄎𠄎に「子𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。カタカナの「ノ、ツ」とその𠄎𠄎の「子𠄎」は、𠄎で卵を育てて孵す形を表しています。そっと卵を抱える形から、𠄎の𠄎𠄎を漂うという𠄎𠄎𠄎𠄎が生じました。𠄎の𠄎𠄎の浮き𠄎のように、空の雲のように、当てもなく漂っている様𠄎を表しています。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎漂」 「𠄎𠄎動票」 「𠄎𠄎き𠄎𠄎」 「𠄎𠄎き𠄎」  
「𠄎𠄎き雲」 「𠄎𠄎き輪」

(4) 沈𠄎𠄎 チン しず - む しず - める

「さんずい」の𠄎𠄎側に、「人𠄎」が置かれて、その𠄎𠄎の辺りに、ワ冠を配した形の文𠄎𠄎です。𠄎𠄎く、牛を犠牲にして、𠄎に沈めたことに𠄎𠄎𠄎した文𠄎𠄎です。「しずむ、しずめる」は、𠄎に沈める、𠄎静かにものを𠄎𠄎う、𠄎が𠄎𠄎かないという𠄎𠄎𠄎に用いられます。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」で表されます。

「𠄎𠄎黙」 「𠄎𠄎𠄎𠄎黙考」 「𠄎𠄎潜」 「𠄎𠄎鬱」  
「𠄎𠄎殿」 「𠄎𠄎没」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」

♪ 愛 歌 ♪

アルプス1

作詞不詳・アメリカ民謡

- 1 アルプス1 槍の で  
アルペン踊りを 踊りましょう (ハイ)
- ※ ランラララ ララララ ランラララ ラララ  
ランラララ ララララ ラララララ
- 2 お で 昼寝をすれば  
ちょうちよが飛んできて キスをする (ハイ)  
(※ くりかえし。以 同じ)
- 3 1 に テントを張れば  
星のランプに が届く (ハイ)
- 4 お で 昼寝をすれば  
かわいいあのこの 夢を る (ハイ)
- 5 槍や穂 は かくれて えぬ  
えぬあたりが 槍穂 (ハイ)
- 6 槍はムコ殿 穂 はヨメご  
でりん気の 焼が岳 (ハイ)
- 7 いのち捧げて するものに  
なぜか冷たい 岩の肌 (ハイ)
- 8 岩魚 (いわな) 釣る に 山路 (やまみち) けば  
雲の彼 (かなた) を 竿で指す (ハイ)
- 9 ザイルかついで 穂 の山へ  
は の 度胸試し (ハイ)
- 10 名残りつきない 池  
またも 返す 穂 岳 (ハイ)
- 11 まめで逢いませよ また 年も  
山で桜の 咲く頃に (ハイ)

\* 1 = 30.303cm × 10000 = 3,030.3m

## 読みの練習 (15)

- (1) 巻きでウエストを巻く。
- (2) 志を包む。
- (3) がなのが取り柄です。
- (4) の背を巻く。
- (5) 彼の郷はとても遠い。
- (6) 実にちょっと帰りしていました。
- (7) 弟のはは尾尾しているよ。
- (8) 原則をいてやり抜く積もりだ。
- (9) 珠のの位は、です。
- (10) のパンの重さはによって違う。
- (11) 治時代に兵を海に集めた。
- (12) 怪しいがそこにしていた。
- (13) 瓶を上げてく。
- (14) 1リットルでを量ります。
- (15) 寝台特急・星号にりいたいなあ。
- (16) 法の容積の位で、18ミリリットルがです。
- (17) 敵の動きを探る候が要だった。
- (18) 要求は頭からけられた。
- (19) 鳥取の砂は名です。
- (20) 「愁いつつにのぼればいばら…」いいですねえ。
- (21) 法とはかけ算のことです。
- (22) が趣？ じられないよ。
- (23) りいバスがく。

- (24) 音がリズムに響くんです。
- (25) 音に響かされた。
- (26) 音に跳び響くのは難しい。
- (27) 雲が音に響く。
- (28) 帯はこのように響かすのです。
- (29) やっと音に響かしてきたぞ。
- (30) 音にいたうわさ音に響かない。
- (31) 音に響か黙は音、と昔音に響かいましたがねえ。
- (32) 物音に響かいに音に響かむ顔。
- (33) ボクサーをマットに音に響かめる。

## 書き取り問題 (15)

- (1) シャクはちのおとをきいてやすらぐ。
- (2) すんぽうをおはかりします。
- (3) おからだはもうだいじょうぶですか？
- (4) だんせいのわふくのたけはそのひとのせたけにあわせる。
- (5) かいどうにもうけられたいちりづか。
- (6) さとごころがついてじっかがこいしい。
- (7) にほんでは、しょうわさんじゅうよねんまでしゃっかんほうでした。
- (8) わたしはしよしんをつらぬきとおします。
- (9) いちりょうのろくじゅうぶんのいちがいちもんめだそうです。
- (10) しょくパンはひとやまかふたやまでいきんです。
- (11) ちゅうとんちをおつたえします。
- (12) がくせいがみせのまえにたむろする。
- (13) きのいっしょうますでさけをくむ。
- (14) ちいさなますめをうめる。
- (15) いっとだるには、じっしょうはいります。
- (16) いちごうのじゅうぶんのいちがいっしゃくです。
- (17) はいせきうんどうがおきてしまった。
- (18) しゃいんのいけんはしりぞけられた。

- (19) ちかくのきゅうりょうにおおくのいえがたった。
- (20) あそこにこだかいおかがありますね。
- (21) じょうしゃはこどもからにしましょう。
- (22) じょういんじょうきやくごひやくめいのジェットき。
- (23) ちかてつにのりかえますよ。
- (24) ジェットコースターにのるのはだいすきです。
- (25) じょうずなはなしにのせられる。
- (26) わたしはいかすいでくるしんでいる。
- (27) いぬのしたがたれる。
- (28) このはなしをきいてよだれをたらすなよ。
- (29) ふりよくをつけてそらへあがる。
- (30) うきくさがいっばいうく。
- (31) ちいさなふねがちんぼつしそうです。
- (32) みかづきがそろそろしずむよ。
- (33) ソファーにからだをしずめてはなしでした。

\* \* \* \* \*

## 5 複<sub>二</sub>文<sub>一</sub> (2)

### 1. 第<sub>二</sub>基<sub>二</sub>文<sub>一</sub>と<sub>二</sub>較<sub>二</sub>文<sub>一</sub>で構成される文<sub>一</sub> (1)

本章では、これまでに<sub>二</sub>て<sub>一</sub>た基<sub>二</sub>文<sub>一</sub>、〈第<sub>二</sub>基<sub>二</sub>文<sub>一</sub>〉と〈<sub>二</sub>較<sub>二</sub>文<sub>一</sub>〉が部<sub>二</sub>として構成される文<sub>一</sub>をご紹介します。

#### ※「中<sub>二</sub>」を部<sub>二</sub>として含む文<sub>一</sub>つ。

##### (1) 仲<sub>二</sub> チュウ なか

「人<sub>二</sub>偏」の<sub>二</sub>側

に「中<sub>二</sub>」を置いた形の文<sub>一</sub>です。<sub>二</sub>の<sub>二</sub>は、<sub>二</sub>弟の<sub>二</sub>の<sub>二</sub>、あるいは<sub>二</sub>年を<sub>二</sub>等<sub>二</sub>する<sub>二</sub>節の<sub>二</sub>の<sub>二</sub>を表す文<sub>一</sub>です。そこから<sub>二</sub>ん<sub>二</sub>という<sub>二</sub>が生じました。さらに、<sub>二</sub>と<sub>二</sub>との<sub>二</sub>を取り持つ<sub>二</sub>、仲立ち、<sub>二</sub>の内輪な関<sub>二</sub>、仲<sub>二</sub>の<sub>二</sub>に用いられます。漢<sub>二</sub>では、「<sub>二</sub> (人偏)」と「<sub>二</sub> (中)」で表されます。

「<sub>二</sub> (なこうど)」 「<sub>二</sub> (なかま)」 「<sub>二</sub> (ちゅうかい)」  
「<sub>二</sub> の名<sub>二</sub>」

##### (2) 沖<sub>二</sub> チュウ おき

「さんずい」の<sub>二</sub>側

に「中<sub>二</sub>」を置いた形の文<sub>一</sub>です。  
“おき”と読んで、海の岸からずっと離れたところ、<sub>二</sub>晴るかす何もない海原を<sub>二</sub>する文<sub>一</sub>です。漢<sub>二</sub>では、「<sub>二</sub> (さんずい)」と「<sub>二</sub> (中)」で表されます。

「<sub>二</sub> 縄」 「<sub>二</sub> い」 「<sub>二</sub> の白波」 「房総<sub>二</sub>」  
「<sub>二</sub> 陸<sub>二</sub>」

##### (3) 忠<sub>二</sub> チュウ

「中<sub>二</sub>」の<sub>二</sub>に「心<sub>二</sub>」を置いた形の文<sub>一</sub>です。<sub>二</sub>を持って、誠実を尽くしてという<sub>二</sub>を表します。「君に忠、親に孝」、つまり忠誠<sub>二</sub>を表す文<sub>一</sub>です。<sub>二</sub>名に用いられる場<sub>二</sub>

は、「ただ」と読みます。漢字では、「(中)」と「(𠂔)」で表されます。

「義」「誠」「君愛」「臣蔵」

※「右」を部として含む文つ。

- (4) 若 ジャク ニヤク ニヤ  
わか-い も-し も-しくは

「草冠」のに「右」を置いた形の文です。は、若いしなやかなの身象った文でしたが、毛髪の様子が冠になり、そのがの形に変わりました。「わかい」と読んで、柔らかい、しなやかな身、そのようなを表します。またそこから、が少ないというも生まれました。「もし、もしくは」の読みは、現はほとんどわれませんが、漢文の訓読にするもので、昭の初期以前の書物には、普通に用いられています。漢文訓読にする読みには、他に、「その、なんじ、しかり、いかん、したがう、ごとし、かくのごとき」等があります。また、仏教でいう「般若(はんにゃ)」とは、悟りのつのことです。漢字では、「(冠)」と「(𠂔)」で表されます。

「年」「輩」「干」

「老(ろうにやくなんによ)」「般経」

「」「牛」「将」「者」

※「左」を部として含む文つ。

- (5) 佐 サ たす-ける すけ

「人偏」の側に「左」を置いた形の文です。脇から差し伸べて助ける、側において助けするというを表します。「すけ」の読みは、平時代の官位の名称にられます。「さ」の読みは、隊の級将校の位に用いられます。また「さ」は、の名に多くられます。漢字では、「(偏)」と「(左)」で表されます。

「𠄎𠄎藤さん」「𠄎𠄎々𠄎𠄎さん」「𠄎𠄎渡島」「補𠄎𠄎𠄎」  
「勤皇𠄎𠄎幕」

※「大𠄎𠄎」を部𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎𠄎𠄎つ。

(6) 器𠄎𠄎 キ うつわ

「大𠄎𠄎」の𠄎𠄎と𠄎𠄎に「口𠄎」を𠄎𠄎つずつ横に並べて置いた形の文𠄎𠄎です。「大𠄎𠄎」は、𠄎𠄎は「犬𠄎」で、𠄎の𠄎𠄎𠄎𠄎が薄れた𠄎𠄎に、𠄎𠄎の形になりました。「犬𠄎」は昔、聖なる動物で、神様に犠牲として捧げられたもので、この「器𠄎𠄎」は、その𠄎の𠄎を容器に𠄎𠄎れて神様に捧げる形を表しています。𠄎𠄎って、「𠄎𠄎器、容器」等、ものを𠄎𠄎れるもの、「器量、器用」等、𠄎𠄎𠄎の𠄎格や𠄎𠄎きさ、「消𠄎𠄎器、呼吸器」等、身𠄎𠄎の働きをする器官、その他多くの𠄎𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎𠄎𠄎を表しています。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (大)」と「𠄎 (口)」で表されます。

「𠄎𠄎量」「𠄎𠄎用」「𠄎𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎機」「𠄎𠄎𠄎」  
「容𠄎𠄎」「呼吸𠄎𠄎」「消𠄎𠄎𠄎𠄎」「𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎」

(7) 春𠄎𠄎 シュン はる

漢𠄎𠄎𠄎の「三𠄎𠄎」に「人𠄎」の𠄎𠄎を重ねた形、その𠄎𠄎に「日𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。この文𠄎𠄎の𠄎𠄎の部𠄎は、𠄎𠄎は「屯𠄎𠄎」で、植物の芽が萌え𠄎𠄎そうとする様𠄎を表すものです。その𠄎𠄎に「日𠄎」を置くことで、なお暖かい、生命が𠄎𠄎𠄎に動き𠄎𠄎そうという気運を表しています。「はる」は、寒く暗い冬を過ごした後の、新たな期待を持った、希望に満ちた、新しい年の始まりを𠄎𠄎𠄎𠄎しています。旧暦では𠄎𠄎𠄎が、春の𠄎𠄎節の始まりです。現𠄎𠄎𠄎たちが𠄎𠄎っている𠄎𠄎陽暦の春は、𠄎𠄎𠄎からです。エネルギーに満ちて生命が𠄎𠄎𠄎に動き𠄎𠄎すことから、𠄎生の躍動期、𠄎𠄎さに溢れている時期にも喩えられます。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎𠄎」と「𠄎」が重なっている形を横の線𠄎𠄎つの「𠄎𠄎」と捕らえて、「𠄎 (大)」と「𠄎 (日)」で表されます。

「夏冬」「戦時代」  
 「眠暁をえず」「宵刻値」  
 「愁」「青」「は曙」「番」  
 「 (かすが)」

・「因」とそれを部として含む文。

(8) 因 イン よ-る ちな-む ちな-みに

「国構え」の枠の「大」を置いた形の文です。敷物の「」に「」が足を広げて横たわった形を象っています。何かを「」地にしてその「」に「え」という「」を表します。「いん」は、「原因、要因、素因」等と用いられます。「ちなむ」とは、ある縁によって何かをなすことで、「ちなみに」とは、それに関して、ついでに「え」の「」に用いられる接続詞です。漢点では、「(国構え)」と「(大)」で表されます。

「縁」「報」「関」  
 「律」「原」「要」「素」  
 「誘」「」

(9) 恩 オン いつく-しむ

「因」の「」に「心」を置いた形の文です。「因」は、「」地に何かを重ねることを「」する文です。「恩」は、「心」に何かを「え」ること、よい印象を与えることという「」があります。「おん」と読んで、親の恩、「生」の恩、「輩」の恩等と用います。漢点では、「(因)」と「(心)」で表されます。

「」「恵」「師」「情」「」  
 「謝」

・「央<sub>㇀</sub>」とそれを部<sub>㇀</sub>として含む文<sub>㇀</sub>つ。

(10) 央<sub>㇀</sub> オウ なか-ば

「大<sub>㇀</sub>」の横棒の<sub>㇀</sub>に、縦棒を跨ぐように、<sub>㇀</sub>角い枠をはめた形の文<sub>㇀</sub>です。<sub>㇀</sub>角い枠は、<sub>㇀</sub>かせを象った形で、「大<sub>㇀</sub>」の<sub>㇀</sub>は、<sub>㇀</sub>が<sub>㇀</sub>足を広げた形です。<sub>㇀</sub>が<sub>㇀</sub>足を広げたところに、<sub>㇀</sub>かせをはめた形を象っているのが、この文<sub>㇀</sub>です。神様に捧げられた犠牲とも、外に向かったの魔除けとも<sub>㇀</sub>われます。漢<sub>㇀</sub>では、「<sub>㇀</sub> (大)」と、音の“おう”の「<sub>㇀</sub>」で表されます。

「<sub>㇀</sub>」

(11) 英<sub>㇀</sub> エイ はな はなぶさ

「草<sub>㇀</sub>冠」の<sub>㇀</sub>に「央<sub>㇀</sub>」を置いた形の文<sub>㇀</sub>です。<sub>㇀</sub>ん<sub>㇀</sub>が窪んだ<sub>㇀</sub>を表しています。“英雄”とは、華やかな<sub>㇀</sub>から、<sub>㇀</sub>れたもの、秀でたものの<sub>㇀</sub>の熟<sub>㇀</sub>です。<sub>㇀</sub>名に用いられるときは、“ひで”と読まれることがしばしばです。また華やかなことから、かつて最も繁<sub>㇀</sub>した<sub>㇀</sub>、イギリスを指す<sub>㇀</sub>に当てられました。漢<sub>㇀</sub>では、「<sub>㇀</sub> (草冠)」と「<sub>㇀</sub> (央)」で表されます。

「<sub>㇀</sub>雄」「<sub>㇀</sub>帝<sub>㇀</sub>」「<sub>㇀</sub>」「<sub>㇀</sub>」

※「天<sub>㇀</sub>」の<sub>㇀</sub>に<sub>㇀</sub>が<sub>㇀</sub>つ付いたものを部<sub>㇀</sub>として含む文<sub>㇀</sub>つ。

(12) 関<sub>㇀</sub> カン せき かか-わる

「門<sub>㇀</sub>構え」の<sub>㇀</sub>に<sub>㇀</sub>が<sub>㇀</sub>に<sub>㇀</sub>つ付いた「天<sub>㇀</sub>」が置かれた形の文<sub>㇀</sub>です。両<sub>㇀</sub>きの<sub>㇀</sub>に、かんぬきをかけた形を象ったものと<sub>㇀</sub>われます。“せき”は、<sub>㇀</sub>境に設けられた<sub>㇀</sub>で、何時も<sub>㇀</sub>ざされています。そこで通<sub>㇀</sub>を改めます。平<sub>㇀</sub>時代から江<sub>㇀</sub>時代を通して、「逢坂関、<sub>㇀</sub>宅関、箱根関、白河関」が<sub>㇀</sub>名です。“せき”では、<sub>㇀</sub>撲の最<sub>㇀</sub>位とその次を「<sub>㇀</sub>関、関脇」と呼んで、幕内の<sub>㇀</sub>士を“せきとり”と呼びま

す。「かかわる」と読んで、二つ三つのものと別のものとの繋ぎ、二つと二つとの関係を表します。ものともものとの繋ぎということから、身運動の繋ぎ、肘や膝を、「関節」と呼びます。漢では、「(門構え)」と「(天)」で表されます。

「節」「節」「節」「節」  
 「白河」「わりい」

(13) 送 ソウ おく - る

二つ三つを付けた「天」に、「しんによう」をえた形の文です。二つを二つ付けた「天」は、ものをで捧げ持つ形を表しています。「おくる」とは、ものを運んでに与える、二つとの別れに際して、その二つを送り、亡くなった二つとの別れ等の二つ三つがあります。漢では、「(しんによう)」と「(天)」で表されます。

「別」「迎」「郵」「放」  
 「り仮名」「り主」「りり」「野辺りり」

※「夫」を部として含む文二つ。

(14) 規 キ

「夫」の側に「見」を置いた形の文です。「夫」は矢の形を表していて、二つ三つぐな矢を組み合わせて、整った円を描くことを二つ三つしています。「ぶんまわし」、すなわちコンパスのことです。そこから二つのルール、「規則、規範、規準」と用いられます。漢では、「(夫)」と「(見)」で表されます。

「則」「範」「準」「模」「律」  
 「定」「程」「定」「法」



購<sub>レ</sub>し費やすことを<sub>レ</sub>いいます。漢<sub>ニ</sub>では、「<sub>レ</sub>（さんずい）」と「<sub>レ</sub>（肖）」で表されます。

「<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>費」「<sub>レ</sub>極的」  
※「<sub>レ</sub>」の旁を部<sub>レ</sub>として含む文<sub>レ</sub>つ。

(18) 底<sub>レ</sub> テイ タイ そこ

「まだれ」の<sub>レ</sub>に、「<sub>レ</sub>」の旁（低の偏は<sub>レ</sub>偏）を置いた形の文<sub>レ</sub>です。「<sub>レ</sub>」の旁は、「<sub>レ</sub>」の<sub>レ</sub>に<sub>レ</sub>を置いた形で、地<sub>レ</sub>を平らに均して、<sub>レ</sub>が住めるようにされた状態を表しています。<sub>レ</sub>地を均すと、周りより<sub>レ</sub>になります。「まだれ」は、建物を<sub>レ</sub>していて、均された<sub>レ</sub>地の低いところに建物が建っている様子を表すのが、この文<sub>レ</sub>です。「そこ」という読みは、低いところという<sub>レ</sub>から生じました。漢<sub>ニ</sub>では、「<sub>レ</sub>（まだれ）」と「<sub>レ</sub>（低の旁）」で表されます。

「海<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>なし」

※「<sub>レ</sub>」を部<sub>レ</sub>として含む文<sub>レ</sub>つ。

(19) 紙<sub>レ</sub> シ かみ

「糸<sub>レ</sub>偏」の<sub>レ</sub>側に「<sub>レ</sub>」を置いた形の文<sub>レ</sub>です。「<sub>レ</sub>」は、<sub>レ</sub>族を象徴する刀を象っていますが、ここでは、平らに均すという<sub>レ</sub>と、「し」という音を表しています。<sub>レ</sub>の皮の繊維を漉き<sub>レ</sub>わせて作るのが「かみ」で、<sub>レ</sub>偏は、その繊維を表しています。漢<sub>ニ</sub>では、「<sub>レ</sub>（糸偏）」と「<sub>レ</sub>（氏）」で表されます。

「<sub>レ</sub>幣」「<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>用」「<sub>レ</sub>雁皮<sub>レ</sub>」

「羊皮<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>れ」「<sub>レ</sub>美濃<sub>レ</sub>」

♪ ♪ 愛 歌 ♪ ♪

冬 景 色

作詞・作曲不詳  
文部省 歌

さ霧 ゆる湊江 (みなとえ) の  
舟に白し の霜  
ただ鳥の声はして  
いまだ (さ) めず 岸の

鳥啼きて に く  
は に 麦を踏む  
げに ののどけしや  
かえり咲の も ゆ

嵐吹きて雲は落ち  
時雨降りて は暮れぬ  
 (も) し燈 の漏れ ずば  
それと かし 野辺の

※ 年に表され、「当時にしては珍しく歌詞が  
調で構成され、は拍という、お洒落  
な特徴がある歌です。」(宮地楽のホームページ  
より「の歌」解)



- (25) 彼らに教育が要なのか。
- (26) は陶やガラスの原料になります。
- (27) 地に雨の予報がた。
- (28) 機に通達をする。
- (29) 玄の鍵をめた？
- (30) ケ原の戦いが運命を決した。
- (31) 急いでします。
- (32) 放をいて動せよ。
- (33) 題をりしてはいけない。
- (34) 制緩が題になっている。
- (35) 我がもしています。
- (36) 像権があるのを知っていたかい。
- (37) 雲散霧してしまった。
- (38) パッとかりがえた。
- (39) 歓声が歌の声をした。
- (40) 海にも山があるんだよ。
- (41) 民生のげをする。
- (42) 幣を作りす。
- (43) 重の差であります。

## 書き取り題 (16)

- (1) すぐにけんかのちゅうさいにはいった。
- (2) ほんじつはちゅうしゅうのめいげつです。
- (3) あにはおきなかしです。
- (4) ちゅうしんぐらをかければ、おきやくがはいる。
- (5) なまえだといちじでただし、ただし\*Bとよむ。
- (6) じゃくねんせいこうけつあつのひともいる。

- (7) はんにやしんぎょうをとる。
- (8) わたしまだわかいのでがんばりたい。
- (9) もしもひとりではこころぼそいかとおもってはやめにきたよ。
- (10) わたくし、もしくはあねがうかがいます。
- (11) さとうさんは、たいへんおおいみょうじのひとつです。
- (12) きんせんてきにたすけてきましたぞ。
- (13) むかしのよんとうかん・だいにのくらはすけ`すけ\*B でした。
- (14) このこはね、たいきばんせいがたなんだよ。
- (15) しょつきをよくみがこう。
- (16) だいじんのうつわとしてはちょっとふそくだ。
- (17) しゅんぶんのひのあさです。
- (18) はるさきはジンチョウゲのよいかおりがしますね。
- (19) このふたつにいんがかんけいがありますか？
- (20) いっせつによると…。
- (21) みずうみにちなんだなまえをつけたのです。
- (22) ちなみにそのわけをちょっとおはなししますと。
- (23) そんなことをおんにきせたらいけません。
- (24) はい、もっとちゅうおうによってください。
- (25) わたしは、えいかいわができなくて…。
- (26) せかいのえいゆうをしらべる。
- (27) からだにはかんせつがいくつあるのかな？
- (28) かんしんをもってはなしをきく。
- (29) ぜいかんのやくわりはじゅうようだ。
- (30) せきしよのあとにちちといく。
- (31)トラックでうんそうする。
- (32) そうげいバスがでていく。
- (33) おくりがなをルビといいます。
- (34) じょうぎをつかってせんをひく。
- (35) さんせいたすうできまる。
- (36) ふしょうのまごで…。
- (37) かおくのしょうしつ！
- (38) あなにかくしたきんかがきえた。
- (39) はやくはしってもりのひをけせ！
- (40) ていへんのひとびとのそんざいをしること。
- (41) へこんでいてそこがわからないよ。
- (42) がようしをよつつにおります。
- (43) きんがみでかみふうせんをおる。

## 5 複文 (2)

### 2. 第基文と較文で構成される文 (2)

前節に続けて、〈第基文〉と〈較文〉が部として構成される文をご紹介します。

※「良」を部として含む文つと、  
「良」を部として含む文つ。

\* この文は墨では、形の<sub>二</sub>で、<sub>一</sub>辺に<sub>二</sub>があるかないかの違いしかありませんが、音と<sub>二</sub>には<sub>一</sub>きな<sub>二</sub>違<sub>一</sub>があります。前者は「良」の<sub>二</sub>義、すなわち善<sub>一</sub>で豊かでゆったりとしたという<sub>二</sub>を、後者は、<sub>二</sub>に限取りをす<sub>一</sub>るとか、がっちりとはまり込むという<sub>二</sub>を表します。漢<sub>二</sub>では何れも「<sub>一</sub>」で表されます。

・「良」を部として含む文つ。

(20) 朗<sub>二</sub> ロウ ほが - らか

「良」の<sub>二</sub>側に「月」を置いた形の文<sub>一</sub>です。  
「良」は、<sub>二</sub>く綺麗な、粒の揃った穀物を表して、  
“よい”ものを<sub>二</sub>します。この文<sub>一</sub>は、清らかな<sub>二</sub>の  
光と「良」で、<sub>二</sub>るくて曇りのない様<sub>一</sub>を表します。  
漢<sub>二</sub>では、「<sub>一</sub> (月)」と「<sub>一</sub> (良)」で表されます。  
<sub>二</sub>が反対になっています。

「<sub>二</sub>読」「<sub>二</sub>」「<sub>二</sub>詠」「<sub>二</sub>吟」

(21) 娘<sub>二</sub> ジョウ むすめ

「女偏」の<sub>二</sub>側に「良」を置いた形の文<sub>一</sub>です。  
「良」は<sub>二</sub>く粒の揃った穀物の<sub>二</sub>で、よいもの、美  
しいものを表しています。“むすめ”は、<sub>二</sub>く美しい<sub>二</sub>を  
<sub>二</sub>します。漢<sub>二</sub>では、「<sub>一</sub> (女)」と「<sub>一</sub> (良  
<sub>一</sub>)」で表されます。

「良(良)さん」「良(良)郎」「良(良)郎(良)郎」

(22) 郎(良) ロウ

「良(良)」の(良)側に「おおざと」を置いた形の文(良)です。  
“ロウ”は、(良)の敬称として、(良)麗しい(良)、あるいは凛々しい(良)の(良)を表します。我が(良)では、「(良)郎、次郎」と、(良)の名前に用いて、(良)強い(良)であれとの祈りを込めたり、(良)弟の順位を表したりします。漢(良)では、「(良(良))」と「(良(良))」で表されます。

「(良(良)さんと次(良)さん」「(良(良) (おみなえし)」

(23) 浪(良) ロウ なみ

「さんずい」の(良)側に「良(良)」を置いた形の文(良)です。(良)が穏やかに流れる、ゆったりと波が立っている様(良)を表す文(良)です。“ロウ”は、ゆったりした波という(良)から、その波に揺られる、足(良)の定まらないという(良)も生まれました。江(良)時代、主を失った武士、禄を(良)まない武士は、「浪(良)」と呼ばれました。現(良)でも、職に就けずにいる(良)、(良)などを(良)指して、何処にも所属していない(良)を、「浪(良)」と呼びます。漢(良)では、「(良(さんずい))」と「(良(良))」で表されます。

「(良(良))」「(良(良)費)」「波(良(良))」「(良(良(良(良))))」

「(良(良(良(良)節 (なにわぶし))」

・「良(良)」を部(良)として含む文(良)つ。

(24) 眼(良) ガン ゲン まなこ め

「目(良)偏」の(良)側に「良(良)」を置いた形の文(良)です。「良(良)」は、ものをしっかりとほめ込むことを表して、ここでは、骨の窪みにしっかりとほめ込んだ「目(良)」を(良)しています。(良)で(良)することは、ものの(良)質に迫ることで、そこから、ものの(良)、(良)動の(良)的の(良)が生じました。

漢字では、「目」(目)と「良」(良)で表されます。

「科」「開げん」「球」「白」  
「近」「白」  
「をつける」「びっくり」

(25) 銀 ギン しろがね

「金偏」の側に「良」を置いた形の文です。  
"ギン"は、白く光沢のある、美しい貴属です。  
"しろがね"とは、白く輝く属の属です。そこから、白く輝くものを、"ギン"ので表すようになりました。また、  
"ギン"は、と並んで、むしろより価なことから、  
易い幣として流通しました。そこから、幣そのものを表すようになりました。漢字では、「(目)」と「(良)」で表されます。

「河」「路」  
「縁鏡」「(いちょう、ぎんなん)」

(26) 根 コン ね

「木偏」の側に「良」を置いた形の文です。の根が地深くいって、がっしりと構えている様を表しています。"コン"と読んで、精神や気の強さを表し、  
"ね"と読んで、最ものところ、ものごとの根、ものごとの生じるところ、の質などを表します。では、のルート of 訳で、平根・立根と用いられます。漢字では、「(目)」と「(良)」で表されます。

「抛」「幹」「茎」  
「気」「皮」  
「球」「平」「立」「ほりほり」  
「ももない」「を詰める」



れまでに「可」が用いられていませんが、「既」は、多く他の文の部首となり、ここにご紹介しました。

「結婚者と婚者」「知知と知知」

「着と着」「制服」

「デジャビュとは感のことで。」

## ※「可」を部首として含む文つ。

### (30) 阿 ア おもねる

「こざと偏」の側に「可」が置かれた形の文です。いとのとともに、がったところ、山谷川のがりくねったところ、クマをします。そのがりくねるから、「おもねる」という訓が生まれました。理をげてに追従する、のを迎えて、それにこびへつらうというを表します。また「ア」は、梵の最初の音で、「阿吽（あうん）」とは、の始まりと終息、つまり宇宙物のを表しています。地名・名に、多く用いられる文です。漢では、「（こざと偏）」と「（可）」で表されます。

「蘇山」「部さん」「の呼吸」

\* 「、理をげて、権者におもねる。」

### (31) 河 カ ガ かわ

「さんずい」の側に「可」を置いた形の文です。旁は、は蛇する川の形を象ったものでしたが、現では、「可」で表しています。がりくねった河、では、黄河を指します。「かわ」の文にはもうつ、「川」がありますが、後にご紹介します。また「江」のも「かわ」のつですが、揚江のことで、これも後にご紹介します。漢では、「（さんずい）」と「（可）」で表されます。

「川」「岸段」「黄」「」

「運<sub>レ</sub>」 「<sub>レ</sub>原<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub> (かわらのさだいじん)」

\* 「<sub>レ</sub>岸段<sub>レ</sub>」は、<sub>レ</sub>きな川の岸に<sub>レ</sub>砂が堆積して段状にできる<sub>レ</sub>のことです。「<sub>レ</sub>」は、「<sub>レ</sub>の川」。 「<sub>レ</sub>原<sub>レ</sub>臣<sub>レ</sub>」は、源融 (みなもとのとおる)、<sub>レ</sub>倉<sub>レ</sub>に歌が取られています。

・「何<sub>レ</sub>」とそれを部<sub>レ</sub>として含む文<sub>レ</sub>つ。

(32) 何<sub>レ</sub> カ なに なん な いず-れ

「人<sub>レ</sub>偏」の<sub>レ</sub>側に「可<sub>レ</sub>」が置かれた形の文<sub>レ</sub>です。<sub>レ</sub>は、<sub>レ</sub>が荷を担いだ形を象った文<sub>レ</sub>でしたが、現<sub>レ</sub>では旁に「可<sub>レ</sub>」を用いています。漢文訓読では「なんぞ」と、疑<sub>レ</sub>や反<sub>レ</sub>の助詞として読まれますが、我が<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>文の「なに」も、代名詞として、疑<sub>レ</sub>詞として、広く用いられます。漢<sub>レ</sub>では、「<sub>レ</sub> (人<sub>レ</sub>偏)」と「<sub>レ</sub> (可<sub>レ</sub>)」で表されます。

「<sub>レ</sub>故 (なぜ)」「<sub>レ</sub>処 (どこ・いずこ)」「<sub>レ</sub>らか」

「<sub>レ</sub> (きかがく、<sub>レ</sub>の<sub>レ</sub>野)」

(33) 荷<sub>レ</sub> カ に

「草<sub>レ</sub>冠」の<sub>レ</sub>に「何<sub>レ</sub>」が置かれた形の文<sub>レ</sub>です。<sub>レ</sub>は、<sub>レ</sub>が荷を担いだ形を象っていましたが、<sub>レ</sub>の部<sub>レ</sub>が<sub>レ</sub>冠になりました。訓の「に」は、荷物、荷台、初荷、船荷と読まれます。また、茎や<sub>レ</sub>の形から、<sub>レ</sub>生植物の「はす」の<sub>レ</sub>にも用いられます。漢<sub>レ</sub>では、「<sub>レ</sub> (草<sub>レ</sub>冠)」と「<sub>レ</sub> (何<sub>レ</sub>)」で表されます。

「<sub>レ</sub>物」「<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>台」「<sub>レ</sub>造り」

「<sub>レ</sub>主」「初<sub>レ</sub>」「船<sub>レ</sub>」「薄<sub>レ</sub> (はっか)」

・「奇<sub>レ</sub>」とそれを部<sub>レ</sub>として含む文<sub>レ</sub>つ。

(34) 奇<sub>レ</sub> キ く-しくも

「大<sub>レ</sub>」の<sub>レ</sub>に「可<sub>レ</sub>」が置かれた形の文<sub>レ</sub>です。辞書の〈<sub>レ</sub>統〉によれば、<sub>レ</sub>がった刀を振って、神様に祈る形を表すとあります。尋常でない、切羽詰まったときの祈りです。「くしくも」と読んで、不<sub>レ</sub>議にも、怪しくもの<sub>レ</sub><sub>レ</sub>を表し、「キ」の音を頭に付けて、普通でない、<sub>レ</sub>知を超えたという<sub>レ</sub>の熟<sub>レ</sub>を表します。「奇<sub>レ</sub>」は、<sub>レ</sub>で割り切れない<sub>レ</sub>のことです。漢<sub>レ</sub>では、「<sub>レ</sub> (大<sub>レ</sub>)」と「<sub>レ</sub> (可<sub>レ</sub>)」で表されます。

「<sub>レ</sub>異」「<sub>レ</sub>抜」「<sub>レ</sub>つ怪な」

「<sub>レ</sub>矯な振る舞い」「<sub>レ</sub>を銜う」

(35) 寄<sub>レ</sub> キ よ-る よ-せる

「ウ<sub>レ</sub>冠」の<sub>レ</sub>に「奇<sub>レ</sub>」が置かれた形の文<sub>レ</sub>です。「よる、よせる」と読んで、<sub>レ</sub>が寄り集まる、寄り添って庇い<sub>レ</sub>うという<sub>レ</sub>を表します。<sub>レ</sub>って、<sub>レ</sub>かの<sub>レ</sub>的で<sub>レ</sub>時的に寄り<sub>レ</sub>って寝起きをともにする、<sub>レ</sub>を借りて<sub>レ</sub>になる、物や<sub>レ</sub>銭を贈るなどの<sub>レ</sub>に用いられるようになりました。漢<sub>レ</sub>では、「<sub>レ</sub> (ウ冠)」と「<sub>レ</sub> (奇<sub>レ</sub>)」で表されます。

「<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>付<sub>レ</sub>」「<sub>レ</sub>り<sub>レ</sub>い」

「<sub>レ</sub>せ算」「<sub>レ</sub>せ書き」「<sub>レ</sub>せ鍋」

※「東<sub>レ</sub>」を部<sub>レ</sub>として含む文<sub>レ</sub>つ。

(36) 練<sub>レ</sub> レン ね-る

「糸<sub>レ</sub>偏」の<sub>レ</sub>側に「東<sub>レ</sub>」を置いた形の文<sub>レ</sub>です。<sub>レ</sub>は「東<sub>レ</sub>」ではなく、これによく似た<sub>レ</sub>で、「レン」の音の文<sub>レ</sub>でした。「ねる」とは、<sub>レ</sub>を灰の汁の<sub>レ</sub>で煮て、白く柔らかくすることを<sub>レ</sub>います。そこから身

𠄎𠄎を鍛える、技術や𠄎𠄎𠄎を磨くという𠄎𠄎𠄎𠄎が生じました。さらに、柔らかくする𠄎𠄎𠄎𠄎から、かき𠄎𠄎𠄎ぜて粘りけを𠄎𠄎させることや、考えや𠄎𠄎を整理し、形を鮮𠄎𠄎にすることを指したりします。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (𠄎偏)」と「𠄎 (東𠄎𠄎)」で表されます。

「𠄎𠄎習」「𠄎𠄎達」「鍛𠄎𠄎」「訓𠄎𠄎」「熟𠄎𠄎」

「𠄎𠄎𠄎𠄎 (れんけん、ねりぎぬ)」

### ※「西𠄎𠄎」を部𠄎𠄎として含む文𠄎𠄎𠄎𠄎つ。

- \* 以𠄎𠄎にご紹𠄎𠄎する文𠄎𠄎に含まれる部𠄎𠄎「西𠄎𠄎」は、形は「西𠄎𠄎」に似ていますが、𠄎𠄎源は異なります。ここではそれをお断りして、𠄎𠄎𠄎𠄎として、「西𠄎𠄎に似た形」と記します。

(37) 煙𠄎𠄎 エン けむり けむ-る けむ-い

「火𠄎偏」の𠄎𠄎側に、𠄎𠄎に「西𠄎𠄎」に似た形、その𠄎𠄎に「土𠄎」が置かれた形の文𠄎𠄎です。「𠄎偏」は𠄎の𠄎𠄎えている様𠄎を、旁は竈から煙が立ち𠄎𠄎って、𠄎𠄎空を覆う様𠄎を表しています。「西𠄎𠄎」に似た形は、𠄎𠄎空を覆う様𠄎を表す部𠄎𠄎です。「けむり」は竈から𠄎𠄎るばかりではなく、焼き𠄎𠄎や戦𠄎、さらに狼煙の暗喩として用いられます。また、「けむる」の読みは、雲や霧や霞、あるいは霧雨で𠄎𠄎𠄎𠄎が妨げられることをも指します。「喫煙」は、タバコを吸うことを指します。漢𠄎𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (𠄎偏)」と「𠄎 (西𠄎𠄎)」で表されます。

「𠄎𠄎雨」「𠄎𠄎突」「𠄎𠄎硝」「𠄎𠄎幕」「𠄎𠄎𠄎 (タバコ)」

「喫𠄎𠄎」「𠄎のないところに𠄎𠄎は立たない」

(38) 要𠄎𠄎 ヨウ かなめ い-る

「西𠄎𠄎」に似た形の𠄎𠄎に、「女𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。𠄎の身𠄎𠄎の𠄎𠄎、"こし"を象った文𠄎𠄎と𠄎われます。「かなめ」とは、ものの𠄎𠄎、もっとも𠄎𠄎切なところ、要𠄎𠄎、扇の骨の𠄎𠄎𠄎に𠄎𠄎をあけて綴る釘のことです。

いる」と読んで、かかるもの、なければならぬもの、要  
なものを指します。漢では、「(西)」と「(女  
)」で表されます。

「」「」「望」「件」

「はの」「(かなめいし)」

・「票」とそれを部として含む文つ。

(39) 票 ヒョウ

「西」に似た形の「示」を置いた形の文です。  
“ヒョウ”は、名前を書いた札、軽くて立つ札のことで、現  
では「投票」のように、選挙のイレフダを指すとして用  
いられています。漢では、「(西)」と「(示  
)」で表されます。

「決」「投用」

(40) 標 ヒョウ

「木偏」の側面に「票」を置いた形の文です。「票」  
は立つもの、立たせるものというで、「偏」  
を以て、印を立てることを表します。くは“しめ”と読  
んで、者の支配領域をす標識でした。また、「濤標(み  
おつくし)」とは、代、運の路をす杭のことで、干満  
による潮位の変がかるように、印が付けられていました。  
“ヒョウ”は、・・をわす、その  
をす“しるし”のことで、漢では、「(偏)」  
と「(票)」で表されます。

「識」「的」「榜」「」「」

「商」「茜さす、紫野き、野(しめの)き…」

「濤(みおつくし)」

♪♪♪ 愛歌 ♪♪♪

の 沙 漠

作 詞

藤まさを

作

々すぐる

- 1 の沙漠を はるばると  
旅の駱駝(らくた)が ゆきました  
ととの 鞍(くら)置いて  
つならんで ゆきました
- 2 の鞍には の嚮(かめ)  
の鞍には の嚮  
つの嚮は それぞれに  
紐(ひも)で結んで ありました
- 3 さきの鞍には 王様  
あとの鞍には お姫様  
ったは おそろいの  
白い衣(うわぎ)を 着てました
- 4 広い沙漠を ひとすじに  
はどこへ ゆくのでしょうか  
朧(おぼろ)にけぶる の夜を  
対(つい)の駱駝は とほとほと  
砂を越えて ゆきました  
黙って越えて ゆきました

※ 「の沙漠」の詞は、気療養のために滞した、県の御(おんじゅく)の海岸でを得たといわれています。

## 読みの練習 (17)

- (1) 弟は兄弟です。
- (2) らかな候が続きました。
- (3) さんよくけよ 山にや惚れるなよ。
- (4) に婿に。
- (5) 新新婦の場です。
- (6) 費癖をそうとうのですがねえ。
- (7) が荒く牙をむく。
- (8) 近用と老用のレンズは違う。
- (9) は、この時したのです。
- (10) のをいてること。
- (11) こので鏡を買おう。
- (12) 座という通りは全にあります。
- (13) も黄もも…と始まる歌がある。
- (14) の部のとのではどちらが辛いのか。
- (15) ももないうわさ。
- (16) 締め切り期が迫ってきた。
- (17) 旅はに。
- (18) ぜいたくのりをつくした王。
- (19) 生物はももする。
- (20) 第線からく。
- (21) 誘惑をけて仕事、仕事。
- (22) 顔から血の気がいた。
- (23) 立ちきを迫られた。
- (24) 今のには婚者は殆どいませんでしたね。

- (25) 着いてみたら、彼は<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>したあとでした。
- (26) 「<sup>ニ</sup>」は、<sup>ニ</sup>で親しんで呼ぶ時につけた  
そうです。
- (27) <sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>ることはしたくない。
- (28) <sup>ニ</sup>川の氾濫を<sup>ニ</sup>ぐ。
- (29) 地球は<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>の星だ。
- (30) <sup>ニ</sup>陸の<sup>ニ</sup>きな<sup>ニ</sup>は海のような。
- (31) ごきげん如<sup>ニ</sup>ですか？
- (32) <sup>ニ</sup>から<sup>ニ</sup>したら<sup>ニ</sup>いものか…。
- (33) <sup>ニ</sup>でもかんでも任せなさい。
- (34) <sup>ニ</sup>故こんなことになったのでしょうか。
- (35) <sup>ニ</sup>れその訳は<sup>ニ</sup>かることでしょう。
- (36) <sup>ニ</sup>井<sup>ニ</sup>風の作<sup>ニ</sup>を読む。
- (37) トラックの<sup>ニ</sup>台から物が落ちた。
- (38) <sup>ニ</sup>妙な<sup>ニ</sup>事が起きたんです。
- (39) <sup>ニ</sup>しくも今<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>の命<sup>ニ</sup>です。
- (40) <sup>ニ</sup>生虫から恐ろしい<sup>ニ</sup>気になることもある。
- (41) <sup>ニ</sup>るとさわると決まっとうわさ<sup>ニ</sup>さ。
- (42) <sup>ニ</sup>を隅に<sup>ニ</sup>せる。
- (43) <sup>ニ</sup>せ<sup>ニ</sup>工のお<sup>ニ</sup>産<sup>ニ</sup>。
- (44) <sup>ニ</sup>災訓<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>する。
- (45) 羊糞は<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>菓<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>つです。
- (46) 今では禁<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>が多い。
- (47) 砂<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>げて<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>る光景。
- (48) <sup>ニ</sup>るように<sup>ニ</sup>雨が降る。
- (49) <sup>ニ</sup>いので息ができないよ。

- (50) 重<sub>い</sub>件<sub>じ</sub>を<sub>し</sub>ま<sub>す</sub>。
- (51) 肝<sub>こ</sub>の事<sub>じ</sub>は<sub>な</sub>んだ？
- (52) <sub>ら</sub>ない<sub>は</sub>みな<sub>処</sub>する<sub>ら</sub>んだ。
- (53) 調<sub>し</sub>査<sub>さ</sub>を<sub>お</sub>配<sub>り</sub>し<sub>ま</sub>す。
- (54) 植<sub>く</sub>物<sub>の</sub>作<sub>り</sub>が<sub>お</sub>趣<sub>味</sub>です。

## 書<sub>き</sub>取<sub>り</sub>題<sub>題</sub> (17)

- (1) きれいなこえでろうどくをする。
- (2) ほがらかなせいかくはすかれる。
- (3) むすめとむすこがわたくしのたんじょうびをいわってくれた。
- (4) むすめふうふがちかくにすんでいるのであんしんです。
- (5) うらしまたろうのでんせつ。
- (6) はろうちゅういほうがでました。
- (7) なみのはなをまく。
- (8) いちがんレンズのカメラ。
- (9) だいぶつかいげんのしき。
- (10) ドングリまなこでみあげる。
- (11) このひとはめがきくなあ。
- (12) にちぎん・とぎん・しぎん…とたすうのぎんこうがある。
- (13) やまはしろがね、あさひをあびて…♪
- (14) こんじょうものがはやったことがあるが…。
- (15) はのねがあわないほどおそろしかった。
- (16) げんていひんはうれゆきがよい。
- (17) このひとにかぎってそんなことはしないよ。
- (18) たすけてくれるとはこころづよいかぎりです。
- (19) ゆうめいじんのいんたいはニュースになる。
- (20) いっぱしりぞいてかんがえる。
- (21) うったえをしりぞける。
- (22) しおがひいた。
- (23) そこのけそこのけ、おうまがとおる。
- (24) こんばんは、かいきげっしょくですよ。
- (25) たいようはすでにかなりたかかった。
- (26) しんゆうのあべさんをしょうかいします。

- (27) せろんにおもねるがくしゃ。
- (28) うみのちかくのかこう。
- (29) ひょうががいまこうたいしているという。
- (30) えどじだいかぶきやくしゃはかわらものといわれた。
- (31) すいかとは「だれか？」ときくこと。
- (32) なにがなんでもがむしゃらにやってきた。
- (33) なんとかおたすけください。
- (34) なぜならこれにはふかいわけがあるのです。
- (35) いずれおとらぬできばえでこうおつつけがたい。
- (36) いつもふかをかけてあるいています。
- (37) にもつがおもくてもちあがらない。
- (38) それはきかいなはなしですねえ。
- (39) くしくもせいねんがっぴがおなじでした。
- (40) ごきふはいっさいおことわりしています。
- (41) おんながさんにんよると、かしましいといわれる。
- (42) ちえをよせあつめましょう。
- (43) よせなべはえいようたつぷりです。
- (44) れんしゅうぶそくでまけちゃった。
- (45) いまでもねりはみがきをつかっています。
- (46) サンタクロースはえんとつからいれる？
- (47) けむりがこくてそとがみえない。
- (48) あめでけむるふうけい。
- (49) たきびがけむいなんてことはなくなりましたね。
- (50) はやくようてんをはなしなさい。
- (51) せんすのかなめをはずすと？
- (52) いるものといらないものをきちんとわけなさい。
- (53) どうひょうようしをかぞえる。
- (54) もくひょうはおおきくもって！

\* \* \* \* \*

## 5 複文 (2)

### 3. 第基文と較文で構成される文 (3)

〈第基文〉と〈較文〉が部として構成される文のです。

#### ※ 「皆」を部として含む文つ。

#### (41) 階 カイ きざはし

「こざと偏」の側に「皆」を置いた形の文です。  
"きざはし"とは、さや幅を揃えて、段段と並び  
りりできるものをいいます。"カイ"と読んで、ものごと  
が的に向かってむプロセスを、音楽では、に動く  
音、の音の (音階) をします。また  
建物の床の重なりを、階・階のように呼んで、そこから  
さらに、を構成するびとのの  
を、「階層、階級」と指すとなりました。漢では、「(こ  
ざと偏)」と「(皆)」で表されます。

「段」「層」「級」「

「段」「音」

#### ※ 「尺」を部として含む文つ。

\* 以のつ文には、「尺」が部として含まれていま  
すが、れもの形には含まれません。漢の簡略の  
途で、このようになりました。ただし、「尺」が、「エキ、タ  
ク、ヤク」という音を表すことから用いられたと考えられます。

#### (42) 駅 エキ えき

「馬偏」の側に「尺」を置いた形の文です。  
のの旁は、ものごとが次々となることを表してい  
ました。"エキ"とは、を交通の段としていた昔、所  
所にを交換する場所を置いて、遠距離の交通と通  
に用いていたものです。現は、鉄の降に利用する場

所を<sub>レ</sub>い<sub>ハ</sub>ます。この文<sub>ニ</sub>には、「うまや<sub>」</sub>という訓がありますが、現<sub>ニ</sub>は「えき<sub>」</sub>も訓として読まれます。漢<sub>ニ</sub>では、「<sub>馬</sub>」と「<sub>尺</sub>」で表されます。

「<sub>馬</sub>」 「<sub>尺</sub>」 「<sub>馬</sub>」 「<sub>尺</sub>」  
「<sub>京</sub>」 「<sub>換</sub>」

(43) 沢<sub>ニ</sub> タク さわ

「さんずい」の<sub>ニ</sub>側に「尺<sub>」</sub>を置いた形の文<sub>ニ</sub>です。<sub>ニ</sub>は旁が、「<sub>駅</sub>」と同様に、次々と<sub>ニ</sub>なることを表すものでした。「さわ<sub>」</sub>は、<sub>ニ</sub>地に<sub>ニ</sub>溜まりが<sub>ニ</sub>なって、<sub>ニ</sub>辺の<sub>ニ</sub>などが生い茂っているところです。また、溪谷の<sub>ニ</sub>流も「さわ<sub>」</sub>と<sub>レ</sub>い<sub>ハ</sub>ます。<sub>ニ</sub>に潤うこと、<sub>ニ</sub>に照り映えることから、「つや<sub>」</sub>という訓もあります。漢<sub>ニ</sub>では、「<sub>尺</sub>」 「<sub>さんずい</sub>」で表されます。<sub>ニ</sub>が逆になっています。

「<sub>山</sub>」 「<sub>光</sub>」 「<sub>沼</sub>地」 「<sub>登</sub>り」

(44) 訳<sub>ニ</sub> ヤク わけ

「言<sub>ニ</sub>偏」の<sub>ニ</sub>側に「尺<sub>」</sub>を置いた形の文<sub>ニ</sub>です。この<sub>ニ</sub>の<sub>ニ</sub>は「<sub>言</sub>、<sub>言</sub>」と同様に、次々と<sub>ニ</sub>なることを表すもので、「ヤク<sub>」</sub>とは、<sub>ニ</sub>を並べて<sub>ニ</sub>換える、別の<sub>ニ</sub>に置き換える、ある<sub>ニ</sub>から別の<sub>ニ</sub>へ置き換えることを<sub>ニ</sub>します。「わけ<sub>」</sub>とは、ものごとのいきさつや理<sub>ニ</sub>を指す<sub>ニ</sub>です。漢<sub>ニ</sub>では、「<sub>言</sub> (偏)」と「<sub>尺</sub>」で表されます。<sub>ニ</sub>偏は、「<sub>第</sub>偏」を採用しました。

「<sub>言</sub>」 「<sub>言</sub>」 「<sub>翻</sub>」 「<sub>通</sub>」  
「<sub>言</sub>」 「<sub>言</sub>」 「<sub>い</sub>」

※「寸<sup>寸</sup>」を部<sup>寸</sup>として含む文<sup>寸</sup>と、  
時<sup>寸</sup>に<sup>寸</sup>する 文<sup>寸</sup>つ。

\* この「寸<sup>寸</sup>」も「尺<sup>尺</sup>」と同様に、長さの<sup>寸</sup>位とは<sup>寸</sup>わりのないものが多いです。それらは、漢<sup>寸</sup>の簡略<sup>寸</sup>の過程で採用されたものです。

(45) 守<sup>守</sup> シュ ス まも-る まも-り もり

「ウ<sup>守</sup>冠」の<sup>寸</sup>に「寸<sup>寸</sup>」を置いた形の文<sup>寸</sup>です。「ウ冠」は屋<sup>守</sup>の形、すなわち<sup>寸</sup>、建物、「寸<sup>寸</sup>」は、<sup>寸</sup>でしっかり持つことを表します。「まもる」は、<sup>寸</sup>でしっかり抱きかかえて守る、<sup>寸</sup>どもを守り、<sup>寸</sup>を守り、<sup>寸</sup>を守ること<sup>寸</sup>します。「かみ」と読んで、平<sup>寸</sup>から江<sup>寸</sup>時代にかけて、地<sup>寸</sup>の長官を指しました。漢<sup>寸</sup>では、「<sup>寸</sup> (ウ冠)」と「<sup>寸</sup> (寸<sup>寸</sup>)」で表されます。

「<sup>寸</sup>衛」「<sup>寸</sup>護<sup>寸</sup>名」「留<sup>寸</sup>」「<sup>寸</sup>り神」  
「お<sup>寸</sup>り」

(46) 村<sup>村</sup> ソン むら

「木<sup>村</sup>偏」の<sup>寸</sup>側に「寸<sup>寸</sup>」を置いた形の文<sup>寸</sup>です。<sup>寸</sup>に<sup>寸</sup>びとが<sup>寸</sup>り添って生<sup>寸</sup>している様<sup>寸</sup>を表しています。地<sup>寸</sup>の、<sup>寸</sup>の少ない、<sup>寸</sup>さな集落がイメージされますが、現<sup>寸</sup>では、<sup>寸</sup>政区画の最も<sup>寸</sup>さい<sup>寸</sup>位としても用いられています。漢<sup>寸</sup>では、「<sup>寸</sup> (木偏)」と「<sup>寸</sup> (寸<sup>寸</sup>)」で表されます。

「<sup>寸</sup>落」「<sup>寸</sup>民」「<sup>寸</sup>町<sup>寸</sup>」「農<sup>寸</sup>」  
「山<sup>寸</sup>」「<sup>寸</sup>」「<sup>寸</sup>祭り」「選<sup>寸</sup>」

(47) 討<sup>討</sup> トウ う-つ

「言<sup>討</sup>偏」の<sup>寸</sup>側に「寸<sup>寸</sup>」を置いた形の文<sup>寸</sup>です。「うつ」とは、戦いの<sup>寸</sup>をうつ、議論を戦わす、隅々まで調べ<sup>寸</sup>げるといふ<sup>寸</sup>です。漢<sup>寸</sup>では、「<sup>寸</sup> (言偏)」





(52) 府 フ

「まだれ」の「付」を置いた形の文です。「まだれ」は、屋と壁を備えた建物で、その「付」が「付」っている、ものがぎっしり詰まったクラを表す文と「付」われます。「フ」は、ものを山集めるところから、政治の、政府、その政府のある場所、つまり、をにするようになりました。全にこの文のいた地名が残っています。現では「京府、阪府」のように、政区画の位のつにえられています。漢では、「(まだれ)」と「(付)」で表されます。

「知事」「県」「政」「付」

・「寺」とそれを部として含む文つ、および時を表す文つ。

(53) 寺 ジ てら

「土」の「寸」を置いた形の文です。「寸」は「土」ではなく、足の動きを表す形で、「寸」が「寸」を表すことから、「寸」足を動かして、仕事をこなす様を表しました。そこから級役の勤める役所を「寸」しました。またその役所は、遠からやってる僧侶の泊所としても提供されて、仏事が営まれるようになりました。そこから現の「てら」になりました。この文は部となって、多くの文の構成素となります。漢では、「(土寸)」と「(寸)」で表されます。

「院」「法隆」「付」

(54) 詩 シ

「言偏」の「寺」側に「寺」を置いた形の文です。「寺」は、「寸」足を動かしてものごとを「寸」めるという「寸」が「寸」あって、それに「偏」を「寸」けることで、「寸」の動きを表現する、「寸」を用いて表現することを指すようになりました。この文には「うた」という訓もありますが、「寸」代には、複の

詩がリズムを刻んで、祈ったり、歌ったりしました。後に文藝が達して、文藝に書き留められたものを指すようになりました。この文藝は我が国では、つい最近まで漢詩を指していて、和歌や俳句のような伝統詩歌と区別していました。現代では、広く漢詩から現代詩歌までを含めて、散文と対される概念を形成しています。漢では、「詩(偏)」と「詩(寺)」で表されます。第偏を採用しました。

「詩歌」「詩文」「詩」「現代詩」  
 「詩統詩歌」「漢詩」「定型詩」  
 「自詩詩詩」「新詩詩詩」

(55) 持詩 ジ も - つ

「手偏」の側面に「寺」を置いた形の文藝です。この傍の詩の形は、「詩」とは異なって、詩でしっかり持つことを表すとされます。「もつ」とは、詩に持つこと、所詩すること、役割を受け持つこと、「もてる」と読むと、詩があること、また「詩持、支持」と、「たもつ、ささえる」という詩も表します。漢では、「詩(偏)」と「詩(寺)」で表されます。

「詩統」「詩久」「詩ち詩い」  
 「詩ち詩す」

(56) 待詩 タイ ま - つ

「行詩偏(彳)」の側面に「寺」を置いた形の文藝です。「詩」は、足を動かしてこまめに働くことを表します。「タイ」は、よく準備して待ち構えることを表して、「接待、待遇」と、詩を持って成すことを詩します。漢では、「詩(彳)」と「詩(寺)」で表されます。

「詩遇」「詩避」「接詩」「期詩」

「𠄎𠄎𠄎𠄎室 (まちあいしつ)」

「居𠄎𠄎𠄎 (いまちづき)」 「寝𠄎𠄎𠄎 (ねまちづき)」

(57) 等𠄎𠄎 トウ ひと - しい など ら

「竹𠄎冠」の𠄎𠄎に「寺𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。隣の「寺𠄎𠄎」の𠄎𠄎𠄎とは𠄎𠄎わりありませんが、𠄎を切って揃える、長さを揃えるというところから、「ひとしい」という訓が生じました。助詞の「など」、接尾𠄎の「ら」も、だいたいのところ、おおよそのところ「ひとしい」という𠄎𠄎𠄎で用いられます。漢𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (竹冠)」と「𠄎 (寺𠄎𠄎)」で表されます。

「𠄎𠄎圧線」 「𠄎𠄎𠄎線」 「𠄎𠄎身𠄎𠄎」

(58) 時𠄎𠄎 ジ とき

「日𠄎偏」の𠄎𠄎側に「寺𠄎𠄎」を置いた形の文𠄎𠄎です。隣の「寺𠄎𠄎」は、𠄎足を𠄎𠄎って細やかに働くという𠄎𠄎𠄎𠄎があつて、ここでは、「日𠄎」が𠄎定に𠄎むに𠄎𠄎れて、誰にも𠄎𠄎しく時が訪れ、時が過ぎるという𠄎𠄎𠄎𠄎を表します。「とき」は、時𠄎𠄎の𠄎𠄎位として、今𠄎では𠄎𠄎𠄎を𠄎𠄎𠄎𠄎𠄎時𠄎𠄎に区切ってあります。さらに時代、そのころの情況、適当な時期という𠄎𠄎𠄎𠄎にも用いられて、自𠄎𠄎の時𠄎𠄎ばかりでなく、𠄎𠄎𠄎𠄎や𠄎との𠄎𠄎𠄎𠄎から生じる機𠄎𠄎を表現する𠄎としても用いられます。漢𠄎𠄎𠄎では、「𠄎 (日𠄎)」と「𠄎 (寺𠄎𠄎)」で表されます。

「𠄎𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎代」 「𠄎𠄎𠄎」 「𠄎𠄎𠄎𠄎」

「𠄎𠄎は𠄎なり」

- \* 「時𠄎𠄎」をご紹𠄎𠄎したところで、𠄎𠄎𠄎𠄎を表す漢𠄎𠄎𠄎𠄎を、𠄎𠄎つご紹𠄎𠄎します。𠄎𠄎れも第𠄎基𠄎文𠄎𠄎と𠄎較文𠄎𠄎で構成されてはおりません。川𠄎𠄎𠄎生は、この𠄎𠄎つの文𠄎𠄎の漢𠄎𠄎𠄎の𠄎𠄎マス𠄎の符号に、「𠄎」を採用されました。これは、「時𠄎𠄎」にちなんだものです。



♪♪♪♪ 愛歌 ♪♪♪♪

郵便物の駈者だった頃

詞 井頼豊  
ロシア民謡

- 1 郵便物の<sup>ぎよしや</sup>駈者だった  
俺はくち  
そこはさなだった  
俺はあのに惚れていた
- 2 に不幸が舞うなど  
俺は夢にも知らなんだ  
駈者の稼業は  
はいつもあの
- 3 やすらいのない々だった  
いは深く胸痛む  
ある頭がを渡し  
「く頼むぞ、どめだ」
- 4 はいななき鞭が鳴る  
はやてのように野を  
だけど胸はつぶれそう  
あのとこんなに遠くなる
- 5 風が悲しくほえていた  
ふいにめがあばれし  
おびえたように脇をた  
俺にはわけがわからない
- 6 動悸<sup>どうき</sup>ははげしくまって  
俺はつめた雪の  
あばれるから飛び降りた  
誰かがに倒れてる
- 7 吹雪は渦巻き荒れていた  
俺は雪をばかきけた  
血の気が失せて立ちすくみ  
寒さがシューバにしみた
- 8 の衆、あのが  
死んでいた  
茶色の瞳をじて  
酒をくれ、く酒を  
もうそのはせない  
(繰り返し)

※ シューバは、毛皮の裏きコート。

## 読みの練習 (18)

- (1) 段のりりが足をきたえる。
- (2) 京へきたい。
- (3) が山たまっている。
- (4) ガニは谷川に住む。
- (5) は通になりたい。
- (6) いはもういいですよ。
- (7) 王の県があります。
- (8) 留電がつっていた。
- (9) 約束をるは用される。
- (10) おりを山げたランドセル。
- (11) 灯台は現にいるのでしょうか？
- (12) 農漁も変している。
- (13) の鎮の神様の…♪
- (14) これは検すべき題だ。
- (15) 背く者を君（主）がつ。
- (16) 弱歳のは者です。
- (17) 長ねえ、今おだよ！
- (18) 集で動する。
- (19) 山袋の「蒲」というは名だ。
- (20) は、部でそののき嫌いが決まります。
- (21) 交渉を利にく。
- (22) が頼りの。
- (23) 彼はきいがなのね。
- (24) 電気をけたら、エアコンもける。
- (25) 政をあなたは用していますか。
- (26) というは京の線にある。
- (27) 井の桜は素晴らしい。

- (28) 現代は理解しがたいよ。
- (29) はが山あって…。
- (30) 夏場だから、とてもつまみ。
- (31) 尾張名屋は城でつ。
- (32) ご招致します。
- (33) 結論をつまでもない。
- (34) 除はしくける割り算のこと。
- (35) 辺の長さがしい角形。
- (36) お茶ついかがですか？
- (37) お前にはからないだろう。
- (38) 刻とちはちがいます。
- (39) 当のことをいします。
- (40) に調を崩す。
- (41) の経つのも忘れた。
- (42) 青代を海外で過ごした。
- (43) の暮れとはのことです。
- (44) 題は重ですよ。
- (45) にはだいたい針があります。

## 書き取り題 (18)

- (1) かいきゅうべつにおこなうスポーツはおおい。
- (2) えきでんのゆらいは、もとしゆくでしゃばをのりついだことから。
- (3) このぬのはこうたくがすごいね。
- (4) さわのぼりでのちをおとすひともいた。
- (5) げんだいごにやくすとわかるのですが…。
- (6) そんなことわたしにとってわけはないよ。
- (7) だいこうじょうやきぎょうにはしゅえいがある。
- (8) るすにするのでしんばいです。
- (9) けんこうをまもるのにいまのところけんめいです。

- (10) わたしにはまもりがみがいる。
- (11) むかしのこどもはこもりがあたりまえだった。
- (12) さんそんにりゅうがくしたこどもたち。
- (13) むらまつりは、いまでもうけつがれている。
- (14) とうろんしゅうかいがはじまった。
- (15) てんしはうちてうたず。
- (16) たろうかじゃはきょうげんにでるじんぶつです。
- (17) かんじのかんむりっていくつあるんですか。
- (18) はなよりだんごとはよくいいました。
- (19) ふとんにくるまる。
- (20) しどうようろくのこうかいをもとめる。
- (21) じんるいをはめつにみちびくことになるぞ。
- (22) このふきんにわがやがあったのだが…。
- (23) ちちのさんぽについていく。
- (24) うめがみをつけた。
- (25) おおさかふときょうとふ。
- (26) ぜんこくにじしゃはいったいくつあるのか。
- (27) てらこやはにほんのしきじりよくをたかめた。
- (28) にほんのしいかをけんきゅうしている。
- (29) こうなったらじきゅうせんだ！
- (30) そんなにはたらくとみもたないよ。
- (31) もちつもたれつのあいだからです。
- (32) ほんじつはおきやくのせったいでつかれました。
- (33) ごうかくはっぴょうをまつ。
- (34) びょうどうにわけようよ。
- (35) ざいさんはもうゼロにひとしい。
- (36) ほんやノートなどをかう。
- (37) わしら、いっしょうけんめいやってきたんですよ。
- (38) じだいはかわりました。
- (39) ただいま、ごぜん0じです。
- (40) ときはかねなりよ。
- (41) ひじょうのときはこれをもってでる。
- (42) せいねんがっぴをきく。
- (43) ねんこうじょれつがくずれてきた。
- (44) としごのきょうだいがいる。
- (45) いっぶんいちびょうもおろそかにできない。

\* \* \* \* \*

## 5 複文 (2)

### 4. 第基文と較文で構成される文 (4)

〈第基文〉と〈較文〉が部として構成される文の最後です。

#### ※「里」を部として含む文つ。

(61) 量 リョウ はか-る

「日」、「一」、「里」を縦に並べた形の文です。この文の形は、袋の液や粒や粉をに入れて、量や重さを量ることをします。取りれた作物の量や重さをはかることにした文です。文を解したときの「日」や「里」とは、接わりはありません。「里」の部の「土」の形は、袋のけた重りを表しています。「リョウ」と読んで、ものの嵩、容量や重量を表して、「はかる」と読んで、量・重さ・積・形をはかることを表します。物理でいう「量」とは、エネルギーを、最もさい物質のことです。漢では、「日 (日)」と「里 (里)」で表されます。

「」「」「」「重」  
「測」「り売り」

・「重」とそれを部として含む文つ。

(62) 重 ジュウ チョウ え おも-い おも-んずる  
かさ-ねる かさ-なる

辺が漢の「千」の形で、その縦の線がそのまま「里」の縦線になった形の文です。この文のは「量」と同じく、作物を袋に入れて重さをはかったことにあります。文を解したときの「里」にはわりありません。「ジュウ・チョウ」の読みは、多くの熟に含まれます。「おもい・おもんずる」と読んで、重いもの、ものの重さ、重く扱う、「重い声、気が重い、重々しい



「動作」「脈と静脈」「詞と名詞」  
 「物と植物」「  
 「のき」

・「動」を旁とする文

(65) 働 ドウ はたら - く はたら - き

「人偏」の側に「動」を置いた形の文です。  
 “く”に“”をえて、がくこと、すなわち  
 “はたらく”ことを表す製の漢です。が働くこと  
 から、機会やの機や作用、自のきにまで  
 広げて用いられます。漢では、「(人偏)」と「(動  
 )」で表されます。

「  
 「この機械のき」

※「貫」を部として含む文

(66) 慣 カン な - れる な - らす

「立心偏」の側に「貫」を置いた形の文です。「貫」は「つ」の事をやり通すという、それに「立心偏」をえて、同じことを繰り返して習熟するというを表します。“なれる・ならず”とは、このように、あることを繰り返して、それに習熟することや、環境が変したときに、をかけてそれに順することをします。自科でも、同じことを続けようとするのきを表します。漢では、「(立心偏)」と「(貫)」で表されます。

「習」「用」「の法則」「習」  
 「腕らし」「肩らし」「足らし」

※カタカナの「ク」を頭に置いた文<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>つ。

\* <sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>さの<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>位の「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」は、カタカナの「ク」の<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>に「メ」を置いた形と<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>ることができます。漢<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>には、カタカナの「ク」の形を頭に置いたものが多くあります。その<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>は様々で<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>には<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>えませんが、形が「ク」であることは共通しています。川<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>生は、これを表す<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>の符号に、「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」の「<sup>ㇿ</sup>」を用いることになさいました。文<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>の「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」との<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>わりはありません。

(67) 負<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup> フ お-う ま-ける ま-かす

カタカナの「ク」の形の<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>に「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」を置いた形の文<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>です。「ク」は「<sup>ㇿ</sup>」を表して、「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」が表す<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>を争うことを<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>すると<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>われます。「おう」と読んで、ものを背負う、責任や負債など、やっかいごとを引き受けることを表します。「まける」とは、争った後に背を向けて逃げることに、劣位に落ちることの<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>です。そこからさらに、値引きすることをも表すようになりました。また、「フ」の音は、<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>のゼロより少ない<sup>ㇿ</sup>である「マイナス」の、電気では陰極の<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>にも用いられます。漢点<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>では、「<sup>ㇿ</sup> (ク)」と「<sup>ㇿ</sup> (貝<sup>ㇿ</sup>)」で表されます。「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」の符号は「賀」に当てられていますので、この<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>は、「負<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」となりました。

「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>担」「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>債」「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>傷」「勝<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」

「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>の<sup>ㇿ</sup>と<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>の<sup>ㇿ</sup>」

(68) 免<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup> メン まぬか-れる

「ク」の<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>に<sup>ㇿ</sup>の<sup>ㇿ</sup>を横にした形、その<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>に<sup>ㇿ</sup>足を<sup>ㇿ</sup>けた形の文<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>です。「まぬかれる」とは、困難や危険から逃れるという<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>ですが、さらに広がって、許して<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>逃す、免除する、<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>を<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>ろさせる、罰として職や地位をはずすという<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>にも用いられます。「メン・ベン」の音と、文<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>の<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>から、多くの文<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>に含まれて、<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>な構成<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>素となります。漢<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>では、「<sup>ㇿ</sup> (ク)」と「<sup>ㇿ</sup> (足)」で表されます。

「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>許<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>」「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>疫」「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>罪」「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>除」「<sup>ㇿ</sup><sup>ㇿ</sup>職」

「放<sup>ㇿ</sup>」 「赦<sup>ㇿ</sup>」 「任<sup>ㇿ</sup>」 「ご<sup>ㇿ</sup>さい」

・「免<sup>ㇿ</sup>」を偏とする文<sup>ㇿ</sup>つ。

(69) 勉<sup>ㇿ</sup> ベン つと-める

「免<sup>ㇿ</sup>」の<sup>ㇿ</sup>側に「力<sup>ㇿ</sup>」を置いた形の文<sup>ㇿ</sup>です。「つとめる」と読んで、<sup>ㇿ</sup>段と<sup>ㇿ</sup>を込める、難しさを克服する、無理をする、励ましながら無理を押し切る、と困難に立ち向かうことを表す文<sup>ㇿ</sup>です。漢<sup>ㇿ</sup>では、「<sup>ㇿ</sup> (免<sup>ㇿ</sup>)」と「<sup>ㇿ</sup> (<sup>ㇿ</sup>)」で表されます。

「<sup>ㇿ</sup>強」 「<sup>ㇿ</sup>」 「勤<sup>ㇿ</sup>」 「刻<sup>ㇿ</sup>励」

※「斤<sup>ㇿ</sup>」を部<sup>ㇿ</sup>として含む文<sup>ㇿ</sup>つ。

\* 「斤<sup>ㇿ</sup>」は“おの”を象った文<sup>ㇿ</sup>です。旁となると、“おのづくり”と呼ばれます。

(70) 近<sup>ㇿ</sup> キン コン  
ちか-い ちか-しい ちか-づく

「斤<sup>ㇿ</sup>」に「しんによう」を<sup>ㇿ</sup>えた形の文<sup>ㇿ</sup>です。“ちかい”とは、距離、場所、<sup>ㇿ</sup>の隔たりが少ない、近接していることを<sup>ㇿ</sup>します。“ちかづく”と読んで、離れたところから側へ<sup>ㇿ</sup>って<sup>ㇿ</sup>る、“ちかしい”と読んで、親<sup>ㇿ</sup>・<sup>ㇿ</sup>弟や姻戚<sup>ㇿ</sup>の他、友<sup>ㇿ</sup>・職場<sup>ㇿ</sup>の親しい<sup>ㇿ</sup>にも用いられます。その他、よく似ているもの、<sup>ㇿ</sup>近なもの、愛情を注ぐものにも用いられます。漢<sup>ㇿ</sup>では、「<sup>ㇿ</sup> (しんによう)」と「<sup>ㇿ</sup> (斤<sup>ㇿ</sup>)」で表されます。

「<sup>ㇿ</sup>代」 「<sup>ㇿ</sup>」 「<sup>ㇿ</sup>傍」 「<sup>ㇿ</sup>親者」 「<sup>ㇿ</sup>郊」

「<sup>ㇿ</sup>似文<sup>ㇿ</sup>」 「<sup>ㇿ</sup>接」 「接<sup>ㇿ</sup>」 「遠<sup>ㇿ</sup>法」

「<sup>ㇿ</sup>」 「<sup>ㇿ</sup>ごろ」 「<sup>ㇿ</sup>藤さんと<sup>ㇿ</sup>松さん」

(71) 質 シツ シチ ただ - す

「斤」を横に「つ」並べてその「貝」を置いた形の文です。「斤」はおのの刃で、もののさをはかるために用いました。「つ」があるのは、「つ」のもののさがしいことを表します。「貝」は「貝」の「貝」で、それらの価値を表します。「シツ」とは、ものの身、そなわった質、その実質のことです。「シチ」と読むと、借の「シチ」して差し「す担」のことで、「しちいれ・しちぐさ・ひとじち」などと用いられます。また、「ただす」という訓には、通常他の文が用いられますが、それを「す」する熟が多くあります。漢では、「(斤)」と「(貝)」で表されます。

「疑」「実剛健」「物」「異」と同  
「屋」「れ」「」

(72) 所 シヨ ところ

「戸」の側に「斤」を置いた形の文です。おのを切り裂く音に「した文」と「われ」です。「ところ」とは場所のことですが、「…がいるところ、…があるところ」の「所」で用いられます。そこから広がって、「…するところの」と「理」を「したり」、「いうところの…」のように、「般に…と「わ」れているという「所」に用いられたりします。「文の形容詞節である「所」代名詞節を「所」するとき、「…するところのもの」とするのは、その例です。漢では、「(戸)」と「(斤)」で表されます。

「作」「住」「役」「台」

(73) 折 セツ お - る お - れる お - り

「手偏」の側に「斤」を置いた形の文です。お

ので𠂔を断ち切る形に𠂔𠂔𠂔𠂔した文𠂔𠂔と𠂔われます。"おる・おれる"とは、𠂔や骨など長いものが途𠂔𠂔でぼきりと折れることです。そこから、ものごとが途𠂔𠂔で立ち𠂔かなくなることや、こしを折って𠂔𠂔𠂔に礼を尽くすことに用いられるようになりました。さらに、命が絶える(死ぬ)、𠂔𠂔をする、くじけるなどの𠂔𠂔𠂔𠂔にも用いられます。"折角"とは、頭巾の角を折ったことに𠂔𠂔𠂔𠂔すると𠂔われますが、𠂔を尽くす、またそれが報われない状𠂔𠂔、残念な様𠂔𠂔を表す𠂔𠂔です。"おり"と読んで、その𠂔𠂔、そのような機𠂔𠂔と用いられたり、折り畳む𠂔𠂔𠂔𠂔から、菓𠂔折・折り詰めなどと、𠂔𠂔や板を折り𠂔𠂔げて作られた容𠂔𠂔を表します。漢𠂔𠂔𠂔𠂔では、「𠂔(𠂔𠂔)」と「𠂔(斤𠂔𠂔)」で表されます。

「𠂔𠂔角」「𠂔𠂔衷𠂔𠂔」「屈𠂔𠂔」「骨𠂔𠂔」

「𠂔𠂔り𠂔𠂔う」「𠂔𠂔り𠂔𠂔」「𠂔𠂔り𠂔𠂔𠂔しい」

### ※「屯𠂔𠂔」を旁とする文𠂔𠂔𠂔𠂔つ。

(74) 純𠂔𠂔 ジュン

「糸𠂔偏」の𠂔𠂔側に「屯𠂔𠂔」を置いた形の文𠂔𠂔です。「屯𠂔𠂔」は、𠂔の𠂔𠂔に陽気がこもって、植物が芽生えようとする様𠂔𠂔を表しています。この文𠂔𠂔はそれに𠂔を𠂔𠂔えて、布地の端に𠂔𠂔れた房を表していると𠂔われます。その房の𠂔が、𠂔𠂔色に染められているところから、"ひといろ"という𠂔𠂔𠂔𠂔が生じました。漢𠂔𠂔𠂔𠂔では、「𠂔(𠂔偏)」と「𠂔(屯𠂔𠂔)」で表されます。

「𠂔𠂔粹」「𠂔𠂔𠂔𠂔𠂔」「𠂔𠂔愛」「𠂔𠂔情」「𠂔𠂔血」

「清𠂔𠂔」「𠂔𠂔𠂔𠂔」

### ※「升𠂔𠂔」を部𠂔𠂔として含む文𠂔𠂔𠂔𠂔つ。

(75) 昇𠂔𠂔 ショウ のぼ-る

「日𠂔」の𠂔𠂔に「升𠂔𠂔」を置いた形の文𠂔𠂔です。「升𠂔𠂔」はマスで穀物を掬い𠂔𠂔げる様𠂔𠂔に𠂔𠂔𠂔𠂔する文𠂔𠂔で、こ

の文「𠄎」は、「𠄎」へ「𠄎」へと立ち「𠄎」ることを表しています。漢「𠄎」では、「𠄎 (日𠄎)」と「𠄎 (升𠄎)」で表されます。

「𠄎」 「𠄎級」 「𠄎」 「𠄎格」  
「𠄎降機 (エレベーター)」 「𠄎氣流」

※「丘𠄎」が含まれる形の文「𠄎」つ。

(76) 兵𠄎 へい ヒョウ つわもの

「丘𠄎」の「𠄎」に漢「𠄎」の「八𠄎」を置いた形の文「𠄎」です。「𠄎」の部「𠄎」は「丘𠄎」の形ですが、「𠄎」ではなく、「斤𠄎」(おの)です。「𠄎」の「八𠄎」の形は「𠄎」を表していて、「𠄎」で「𠄎」を「𠄎」った形を表したものと「𠄎」われます。「𠄎」は武𠄎のこと、武𠄎を「𠄎」に「𠄎」って戦う姿を象った文「𠄎」です。「へい・ヒョウ」とは、武𠄎を「𠄎」った「𠄎」である「兵隊」で、さらに戦うための組織の「𠄎隊」、戦うための「𠄎」である「武𠄎」、あるいはさらに「𠄎」がかりな「兵𠄎」を「𠄎」する文「𠄎」です。「つわもの」という訓は、現代文では用いられません、「𠄎」にはしばしば現れます。漢「𠄎」では、「𠄎 (丘𠄎)」と「𠄎 (八𠄎)」で表されます。

「𠄎隊」 「𠄎卒」 「𠄎糧」 「𠄎どもが夢の跡」

(77) 浜𠄎 ヒン はま

「さんずい」の「𠄎」側に「兵𠄎」を置いた形の文「𠄎」です。ただしこれは略「𠄎」で、旧「𠄎」の傍は、「賓」(「𠄎」級で紹介「𠄎」します。)で、「ヒン」の音は、これに「𠄎」します。「はま」は、海と陸の接するところ、「𠄎」が接するところの「𠄎」です。漢「𠄎」では、「𠄎 (さんずい)」と「𠄎 (兵𠄎)」で表されます。

「海𠄎」 「京𠄎地𠄎」 「横𠄎」 「𠄎離宮」  
「砂𠄎」

※「斗」を部として含む文つ。

(78) 科 カ

「ノ木偏」の側に「斗」を置いた形の文です。  
 「ノ木偏」は穀類の穂を象ったもので、「斗」はマスを表しています。マスで穀物を測って、級をけるの文です。「カ」の音は、事物を類し・析し、整理して級をけることを指します。「科」とは「Science」の漢字で、「析する」と解されま  
 す。それは、「自然科学、社会科学、文科」の分野に  
 使われます。また「カ」は、事物を類し・級をけた  
 ものの名称、生物でいう「目・科・属」のように  
 用いられます。「科挙」とは、科の管理登用試験のことで  
 す。また一般に訓読はされませんが、「とが」の訓がありま  
 す。「つみとが」として、罪を級にけることを表します。  
 もう一つ、「しな」という訓があります。「層をなしたもの、  
 層をなしているところ」の漢字で、地名に用いられる場  
 所、山等の地、段状の原などを指しています。また  
 「しな」は、「しなをつくる」と、気の惹くような仕  
 を指します。そこから芝居の「せりふ」の漢字も生じまし  
 た。漢字では、「(ノ木偏)」と「(斗)」で表  
 されます。

「科挙」「とが」「つみとが」「しな(せりふ)」「  
 しな」「しなをつくる」「  
 蓼原」

\* 「カ」と音読する文に、「課」と「科」のつがあります。前者は「複文(1)」の(7)にご紹介しました。このつのは、は大きく異なりますが、用いられる範が似通っています。そこで一般に、前者を「偏のカ」(偏に)、後者を「ノ木偏のカ」(ノ木偏に)と呼んで区別しています。用途にご注さい。

※「勺」を部として含む文つ。

(79) 約 ヤク

「糸偏」の側に「勺」を置いた形の文です。ひもを引き締めて結んだものを象っているとされます。

“ヤク”は、ひもを結んで印にすること、それを取り決めごとの（あかし）とすることを表しています。さらにひもを引き締めることから、“つづめる、つづまやか”の訓が生じました。“つづめる”とは、くさくまとめること、簡にすること、“つづまやか”とは“つましい”ともって、派でない、引き締めた生度をいいます。さらにその「つづめる、簡にすること」というから、“あらし、おおむね、つづめてうと”というが生じました。「約すると…」、「のは約です。」のように用います。また「約」とは、つ以のを同じで割ること、「約」とは、で、とを同じで割ることを指します。漢では、「(糸偏)」と「(勺)」で表されます。

「束」「契」「予」「定」「儉」

「」「」「」「」

「横のはです。」

※「垂」を部として含む文つ。

(80) 睡 スイ ねむ-る

「目」の側に「垂」を置いた形の文です。のまぶたがれて、眠くなってするというです。“スイ”の音は「垂」にします。“ねむる”という訓は、般には用いられません。通常、少し後にご紹介する「眠」で表されます。漢では、「(目)」と「(垂)」で表されます。

「眠」「魔」「蓮」「午」

♪♪♪♪♪ 愛歌 ♪♪♪♪♪

汽

作詞不詳（文部省歌）

作 愛羅

今は山 今は

今は鉄橋渡るぞと

うも無く トンネルの

間をって広野原

遠くにえるの屋

くにえる町の軒

ややや

後へ後へと飛んでく

廻り燈籠（まわりどうろう）の画（え）のように

変る景色のおもしろさ

とれてそれと知らぬに

くも過ぎる幾

※ 愛羅の眠るがある、新潟県では、毎夕になると「汽」のメロディーが流れるそうです。

## 読みの練習 (19)

- (1) 言葉を違えると意味が変わるよ。
- (2) 本の背を押し通す。
- (3) だって圧を感じます。
- (4) 慎重に事をおこさないよ。
- (5) 言葉の響きに惹かれた。
- (6) いい本物をネットでかついだ。
- (7) あの人の意志を凝んじて…。
- (8) 過去と現実をねねわせて考える。
- (9) ちょうど一枚がなくなった。
- (10) 生物の分類を知る。
- (11) 本をまいたのはあなたでしょう？
- (12) 不動産の売買でもうけている。
- (13) 彼の気持ちにはゆれいている。
- (14) 本は本を動かすのに使われていないので…。
- (15) 本を厳格してもらいたい。
- (16) そんなにしてもよく意義とは？
- (17) あの頃は生き盛りでしたからねえ。
- (18) 生き蟻や生き蜂のようです。
- (19) 知恵を動かすことです。
- (20) 本句をたくさん知りたい。
- (21) いい本れた本筆。
- (22) 本らし運をした。
- (23) 勝あった！
- (24) ♪ …赤とんぼ、本われて本たのはいつの本か。
- (25) 今本の本は本けるが…。
- (26) 腕はダメでも本でなら動かすぞ。

- (27) け惜しみをうなよ。
- (28) 予防注射で疫ができる。
- (29) 軽率のそしりをれない。
- (30) あのほど勤なはいない。
- (31) 前では泣くまいとめた。
- (32) 最運不足です。
- (33) 藤さんお久しぶりです。
- (34) い将物になるぞ。
- (35) このはにしいです。
- (36) 歩歩とづく。
- (37) はい、があります。
- (38) 屋に通った僧。
- (39) 責任をさねば…。
- (40) 今いる場は？
- (41) いっそう努するでございます。
- (42) 弁慶の泣きを打った…。
- (43) 今、帰ってきたです。
- (44) はとっくに挫しましたよ。
- (45) の腰をる。
- (46) ついに彼はれた。
- (47) つりにしてりにれた。
- (48) 目的なってどんな？
- (49) でできた置物。
- (50) 試験で気がいい。
- (51) 山のにがる。
- (52) 時代の法を今でもぶ。



- (26) おっ、まかしたあ、きんぼしだ。
- (27) まけずおとらずきがつよい。
- (28) なにのめんきよでもほしい。
- (29) つみをまぬかれる。
- (30) べんきょう、べんきょうつてうるさいなあ。
- (31) ぎじゅつのこうじょうにつとめる。
- (32) きんせいともくせいがせっきんした。
- (33) きんきょうをおはなししましょう。
- (34) えきにちかいとちはたかい。
- (35) ちかちか、このやどにまたきます。
- (36) おおづめにちかづく。
- (37) ほんしつてきにこれはただしい。
- (38) ひとじちのこうかんということもあつた。
- (39) しんそうをただすひつようがある。
- (40) やくしょにいく。
- (41) しょけんをかく。
- (42) ところかわればしなかわる。
- (43) くるしいどころのさわぎじゃない。
- (44) うよきよくせつがありました。
- (45) きのえだをおる。
- (46) そこでみちがひだりにおれるんです。
- (47) おりをみておはなししましょう。
- (48) じゅんすいなひとですnee。
- (49) じゅんぶんがくはあまりうれないんです。
- (50) じょうしょうきりゆうにのる。
- (51) ひがのぼりひがしずむ。
- (52) かいがいはいのぜひをきく。
- (53) ひょうろうぜめでたたかう。
- (54) かいひんにちいさなむらがみえた。
- (55) はまべでうたおうか。
- (56) しょうがっこうのりかのべんきょう。
- (57) おおいしくらのすけのやましのすまい。
- (58) どんなにせつやくしてもおかねがたまらん。
- (59) たっぷりすいみんじかんがあるぞ。

## 🕒 ティータイム . . .

おおか こと 『く々のうた』をる』(講)より

歯の抜たの屋をて居る

むたまがわ  
武川

「歯の抜たの屋をて居る」、ただこれだけではのことかわからないといます。現代ではこういう習自あまりなくなっているかもしれませんが、ぜんぜんなくなっているわけではないことは、これを新にしたときの読者からの投書で知ったのです。

これのは、子供の歯が生え替わるときにポロッと抜けます。の歯がポロツとなれば、昔だったら縁の、いまの地だとうなるかわかりませんが、縁のへ投げ込んで「鼠の歯と生え替われエ」とかしてやるのです。の歯がポロツといったときには、に投げるのです。藁(わら)屋へポーンと投げると、わりとまりがよかったのかもしれませんが、現代、トタン屋などでコロコロコローツと落ちてしまうでしょう。

とにかくそういう情景をうたっているのです。江戸時代に、の歯がポコッと抜けた子供が、おさんに教えられたとおりに「鼠の歯と生え替われ」として歯をポーンと屋に投げて、どのへんにまるかなあとしているところなのです。じつに断的なものにすぎないけれども、これはおもしろい句です。常生ののというものがあるといえるところです。

というものは場によっては地の神々をもかす。これは平時代の紀之もそう書いているし、代のヨーロッパのなどはみなそうじて書いているし、の代のたちもそうして書いています。なかなか地は揺るがないのですがもそうして書いているのです。それだからといって、はものすごく層なことを書くものではないのです。じつはひじょうにさなことを書きます。さなことがのを、魂を震撼(しんかん)するのです。これがの不議です。というものがもしものすごく仰な、袈裟(おおげさ)なもの、袈裟

なことを書いて、それで「あ」が「あ」くというのでは、これはたいしたことないです。「あ」袈裟なことを書いたらみんながひっくり返って驚くかもしれないということがあります。

しかし、「あ」さなことを書いて、それが「あ」を「あ」かすからこそ、「あ」の「あ」はすごいということになり、「あ」のすばらしさがそこに生じるわけです。「あ」というものはじつは「あ」当に「あ」さなことから「あ」するのです。そういう「あ」でいうとこの「歯の抜た「あ」の屋「あ」を「あ」て居る」というのはやはり「あ」さなことなのですが、そこにひとつのほほ笑みがある。このほほ笑みが「あ」事なのです。「あ」は「あ」をつり「あ」げて「あ」か「あ」類の「あ」の「あ」のこととか、そういうことを考えるだけではなくて、ほんとにささやかなことをも「あ」切にして取り込んでいる、それが「あ」だということです。

この句が新「あ」に「あ」たときに、たくさんはがきや「あ」をいただきました。「あ」は「あ」すたれた風習だが」と書いたのですが、そうしたら、いや、すたれてないというのがずいぶんきたのです。そういうのを読んで、「あ」は、こういう断「あ」にすぎない「あ」が「あ」勢の「あ」に温かい感じで受け「あ」められて、これを読んだ「あ」の「あ」で、その「あ」が過去に遡るきっかけをつくったのだと「あ」いました。

\* \* \* \* \*

【附】 これまでに出てきた漢点字一覧

第一回

漢数字とその《近似文字》

- 1 一 二 三 四 五 六  
 7 七 八 九 十 廿 百  
 13 千 14 万 15 億 16 兆 \* ○  
 《壘 (一) 参 (三) 丸 (九)  
 意 (億) 元 (兆)》

第一基本文字とその《近似文字》

- 1 目 2 糸 3 系 4 比 5 数 6 家 7 宿 8 学  
 9 言 10 語 11 頁 12 貝 13 金 14 木 15 草  
 16 犬 17 子 18 都 19 市 20 発 21 食 22 馬  
 23 田 24 竹 25 土 26 手 27 戸 28 人 29 仁  
 30 水 31 氷 32 力 33 示 34 私 35 走 36 進  
 37 火 38 女 39 玉 40 方 41 石 42 耳 43 車  
 44 門 45 病 46 行 47 店 48 月 49 肉 50 分  
 51 日 52 性 53 心 54 口 55 囿 56 十 57 止  
 《真 面 (目) 云 (言) 首 (頁) 具 (貝)  
 未 末 本 (木) 由 曲 (田)  
 永 (氷) 必 (心) 才 (十) 正 (止)》

第二回

複合文字 (1)

漢数字および第一基本文字を部首とした文字

- 1 林 2 森 3 材 4 相 5 想 6 果  
 7 課 8 休 9 保 10 来 11 味 12 体  
 13 字 14 宗 15 宝 16 安 17 案 18 穴  
 19 究 20 完 21 院 22 軍 23 計 24 早  
 25 協 26 直 27 朝 28 世 29 葉 30 古  
 31 苦 32 枯 33 湖 34 有 35 存 36 在  
 37 聞 38 間 39 問 40 開 41 閉 42 回  
 43 国 44 固 45 個 46 兄 47 見 48 介  
 49 先 50 祝 \* 兌 51 説 52 税 53 覚  
 54 視 55 界 56 榮 57 勞 58 加 59 賀  
 60 化 61 花 62 貨 63 信 64 恋 65 芸  
 66 会 67 絵 68 伝 69 転 70 秋 71 畑  
 72 炎 73 談 74 点 75 然 76 燃

第三回

- |       |       |       |       |       |       |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 77 品  | 78 唱  | 79 单  | 80 和  | 81 合  | 82 給  |
| 83 拾  | 84 答  | 85 員  | 86 損  | 87 史  | 88 使  |
| 89 舌  | 90 活  | 91 舍  | 92 話  | 93 絹  | 94 季  |
| 95 委  | 96 好  | 97 姉  | 98 妹  | 99 男  | 100 細 |
| 101 思 | 102 胃 | 103 油 | 104 典 | 105 惡 | 106 応 |
| 107 係 | 108 孫 | 109 泳 | 110 混 | 111 財 | 112 社 |
| 113 証 | 114 徒 | 115 道 | 116 貧 | 117 防 | 118 明 |
| 119 庫 | 120 連 | 121 更 | 122 便 | 123 能 | 124 態 |

比較文字とその《近似文字》

- |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|
| 1 父  | 2 母  | 3 上  | 4 中  | 5 下  | 6 右  |
| 7 左  | 8 大  | 9 小  | 10 出 | 11 入 | 12 高 |
| 13 低 | 14 優 | 15 良 | 16 可 | 17 東 | 18 西 |
| 19 南 | 20 北 | 21 鶴 | 22 龜 | 23 互 | 24 皆 |
| 25 凸 | 26 凹 |      |      |      |      |

《天 (太) 夫 (大) 片 (出) 氏 (低)》

第四回

- |      |      |      |      |      |      |
|------|------|------|------|------|------|
| 27 尺 | 28 寸 | 29 丈 | 30 里 | 31 貫 | 32 匁 |
| 33 斤 | 34 屯 | 35 升 | 36 斗 | 37 勺 |      |

《斥 (斤) 丘 (升)》

比較文字に類似した漢字

- |          |      |      |      |      |      |
|----------|------|------|------|------|------|
| 1 乘      | 2 垂  | 3 浮  | 4 沈  |      |      |
| 複合文字 (2) |      |      |      |      |      |
| 1 仲      | 2 冲  | 3 忠  | 4 若  | 5 佐  | 6 器  |
| 7 春      | 8 因  | 9 恩  | 10 央 | 11 英 | 12 関 |
| 13 送     | 14 規 | 15 贊 | 16 肖 | 17 消 | 18 底 |
| 19 紙     | 20 朗 | 21 娘 | 22 郎 | 23 浪 | 24 眼 |
| 25 銀     | 26 根 | 27 限 | 28 退 | 29 既 | 30 阿 |
| 31 河     | 32 何 | 33 荷 | 34 奇 | 35 寄 | 36 練 |
| 37 煙     | 38 要 | 39 票 | 40 標 | 41 階 | 42 馱 |
| 43 沢     | 44 訳 | 45 守 | 46 村 | 47 討 | 48 冠 |
| 49 団     | 50 導 | 51 付 | 52 府 | 53 寺 | 54 詩 |
| 55 持     | 56 待 | 57 等 | 58 時 | 59 年 | 60 秒 |
| 61 量     | 62 重 | 63 種 | 64 動 | 65 働 | 66 慣 |
| 67 負     | 68 免 | 69 勉 | 70 近 | 71 質 | 72 所 |
| 73 折     | 74 純 | 75 昇 | 76 兵 | 77 浜 | 78 科 |
| 79 約     | 80 睡 |      |      |      |      |